河内長野市埋蔵文化財調査報告書M

本多町北遺跡 下里町遺跡 西代藩陣屋跡 三日市遺跡 市町東遺跡 加塩遺跡

2000年3月

河内長野市教育委員会

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に 代表される和歌山や奈良へ向う街道の要衝として発展してきた街です。この為 市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市は大阪市内への通勤圏に位置しているため住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、更には未来の市民へ伝えていく事は、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達のメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成12年3月

河内長野市教育委員会 教育長 福 田 弘 行

- 1. 本書は平成9~11年度に河内長野市教育委員会が実施した遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査にかかる費用は本多町北遺跡は日本農薬株式会社、下里町遺跡は河内長野市、西 代藩陣屋跡は宗教法人日本基督教団、三日市遺跡(MIC98-2)は三井不動産建設株 式会社、加塩遺跡は株式会社富士木材が負担した。三日市遺跡(MIC99-5)・市町 東遺跡は原因者が負担して実施した。
- 3. 調査は本市教育委員会教育部社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦を主担とし、 同課文化財保護係鳥羽正剛、河内長野市立ふれあい考古館館員藤原哲を担当者として 実施した。
- 4. 調査及び本書の執筆・編集は尾谷、鳥羽、太田宏明(同課文化財保護係)、藤原が行った。河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子がこれを補佐した。文責は各文末に記している。
- 5. 写真撮影は遺構については鳥羽・藤原・中西、遺物については中西が行った。
- 6. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。(敬称略) 阿部園子・内田(川島)伸子・大塚美幸・菊井佳弥・喜多順子・杉本祐子・高橋知佐子・ 田川富子・辻宏子・恒石健志・中村幸子・野田陽子・華井京子・枡本裕子・松尾和代・ 牟田口京子・山上美幸
- 7. 発掘調査については下記の方々の協力を得た。記して感謝する。(敬称略) 日本農薬株式会社・宗教法人日本基督教団・三井不動産建設株式会社・富士木材株式 会社・島本勝広・小川博顕・株式会社島田組・中央建設株式会社・道本工務店・写測 エンジニアリング株式会社・株式会社ジェクト・株式会社夏原技研
- 8. 本調査の記録はスライドフィルムなどでも保管されており、広く一般の方々に利用されることを希望するものである。

凡例

- 1. 本報告書に掲載されている標高はTPを基準としている。
- 2. 土色は「新版標準土色帖 | 1990年度版による。
- 3. 平面測量は国家座標第VI系による5mメッシュを基準に実施したものである。
- 4. 図中の北は磁北である。
- 5. 遺構実測図の縮尺は、1/20・1/25・1/50・1/60・1/100・1/120・1/160である。
- 6. 遺構名は下記の略記号を用いた。 SB…掘立柱建物 SI…竪穴住居 P…柱穴 SD…溝 SG…耕作地 SK…土坑 SP…遺物出土ピット SR…土壙幕 SW…石垣 SY…
 - S K…土坑
 S P…遺物出土ピット
 S R…土壙墓
 S W…石垣
 S Y…窯

 N R…自然流路•落ち込み
- 7. 遺物実測図の縮尺は、土器1/4、石器2/3、鉄器1/3を基準としているが、遺物の状況により変えている。
- 8. 須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器の断面は黒塗り、弥生土器・土師器・土師質土器・石器の断面は白抜き、鉄器の断面は斜線である。
- 9. 須恵器の編年は田辺昭三氏の編年を用いた。
- 10. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。

目 次

序文		
例言		
凡例		
目次		
挿図目と	*	
表目次		
写真目》	*	
第1章	調査の状況	1
第2章	調査の結果	5
第1額	市 本多町北遺跡 (HDN97−1)	5
1	概略	5
2	層序	5
3	遺構と遺物	6
4	まとめ	12
第2領	市 下里町遺跡(SST97−1)	13
1	位置と環境	13
2	層序	13
3	遺構と遺物	14
4	まとめ	16
第3領	西代藩陣屋跡 (NDH98−3)	18
1	位置と環境	18
2	概略	18
3	遺構と遺物	18
4	まとめ	20
第4領	币 三日市遺跡(M I C 98−2) ·······	2
1	位置と環境	21
2	層序	21
3	遺構と遺物	22
4	まとめ	28
第5頁		30
1	位置と環境	30
2	層序	30
3	a 構と 遺物	30

4	まとめ	31
第6節	節 市町東遺跡(Ⅰ C E 99- 1) · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	32
1	位置と環境	32
2	層序	32
3	遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32
4	まとめ	34
第71	節 加塩遺跡(KSO99−1)	35
1	位置と環境	35
2	層序	35
3	遺構	35
4	遺物	44
5	まとめ	45
第81	節 加塩遺跡における考古地磁気年代推定	55
1	考古地磁気年代推定の基礎	55
2	試料の採取と測定	56
3	残留磁化測定結果	58
4	年代推定	60
5	引用文献	61
	挿 図 目 次	
	1中 囚 口 1八	
第1図	河内長野市遺跡分布図(1/40000)	3
	本多町北遺跡(HDN97-1)	
第2図	調査区位置図(1/5000)	5
第3図	遺構配置図(1/120) 7~	- 8
第4図	包含層出土遺物実測図	12
	下里町遺跡(SST97-1)	
第5図	調査区位置図(1/5000)	13
第6図	遺構配置図(1/160)	13
第7図	SD5出土遺物実測図	14
第8図	包含層出土遺物実測図	16
	西代藩陣屋跡(NDH98-3)	
第9図	調査区位置図(1/5000)	18
第10図	遺構配置図(1/100)	18
第11図	SD2、SK1、包含層出土遺物実測図	19

三日市遺跡 (MIC98-2)

第12図	調査区位置図(1/5000)	21
第13図	遺構配置図(1/120)	21
第14図	SB1遺構実測図(1/60)	22
第15図	SK1・2・4・7 出土遺物実測図	25
第16図	SP1出土遺物実測図	26
第17図	包含層出土遺物実測図	28
	三日市遺跡 (MIC99-5)	
第18図	調査区位置図(1/2500)	30
第19図	遺構配置図(1/50)	30
第20図	包含層出土遺物実測図	31
	市町東遺跡 (ICE99-1)	
第21図	調査区位置図(1/5000)	32
第22図	遺構配置図(1/50)	32
第23図	包含層出土遺物実測図	33
	加塩遺跡(KSO99-1)	
第24図	調査区位置図(1/5000)	35
第25図	SB1遺構実測図(1/60)	36
第26図	S B 2 遺構実測図(1/50) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	36
第27図	KSO99-1 遺構配置図 (1/100)	~38
第28図	SI1遺構実測図(1/25)及び出土遺物実測図	39
第29図	SK1出土遺物実測図	40
第30図	第1調査区包含層出土遺物実測図	41
第31図	SI2遺構実測図(1/50)及び出土遺物実測図	41
第32図	SK7出土遺物実測図	42
第33図	SY1遺構実測図(1/20)	43
第34図	SY2遺構実測図(1/20)	43
第35図	SY2出土遺物実測図	44
第36図	パイロットサンプルKA-30の直行ベクトル図	58
第37図	消磁前(NRM)と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図	59
第38図	広岡により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の	
	地磁気永年変化曲線と測定結果	60

表 目 次

第1表	発掘届出件数月別一覧表	1
第2表	主な発掘調査一覧表 1~	~ 2
第3表	河内長野市遺跡地名表	4
第4表	熱残留磁気測定結果	59
第5表	考古地磁気測定結果(平均磁化方向)	60
	写真目次	
	本多町北遺跡 (HDN97-1)	
写真 1	調査区近景(北から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
写真 2	調査区全景 (南から)	
写真3	SD1、SG1~5、NR1 (西から)	9
写真4	SW1・2 (西から)	10
写真5	SW1・2 (北から)	10
写真 6	包含層出土遺物	12
	下里町遺跡(SST97-1)	
写真7	調査区全景(東から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
写真8	SD2・3(南から)	15
写真9	包含層出土遺物	17
	西代藩陣屋跡 (NDH98-3)	
写真10	S D 2 、 S K 1 、包含層出土遺物	19
写真11	調査区全景(東から)	20
	三日市遺跡 (M I C 98-2)	
写真12	調査区全景(西から)	23
写真13	SK1・2・4・7出土遺物	25
写真14	SR1 (西から)	27
写真15	包含層出土遺物	29
	三日市遺跡 (MIC99-5)	
写真16	調査区全景(南から)	30
	市町東遺跡 (ICE99-1)	
写真17	調査区全景(南から)	32
写真18	包含層出土遺物	34

加塩遺跡 (KSO99-1)

写真19	第1調査区全景(北から)	47
写真20	第1調査区全景(東から)	47
写真21	SB1(東から)	48
写真22	SI1(南から)	48
写真23	SI1(東から)	49
写真24	竈検出状況(北から)	49
写真25	第2調査区全景(南から)	50
写真26	SI2(東から)	50
写真27	SY1(南から)	51
写真28	SY2 (北から)	51
写真29	遺物 SI1 (65~67·69)、SK1 (70)、第1調査区包含層 (71~76) …	52
写真30	遺物 SI2 (77・78)、SK7 (79)、SY2 (80~83)	53

第1章 調査の状況

平成11年の文化財保護法57条の2および3の発掘届及び発掘通知の件数は、総数172件、 そのうち発掘届152件、発掘通知20件である。今年は新規発見届及び通知はなかった。

今年の発掘届にみられる原因者の状況は、大規模な開発よりも個人住宅の新築及び改築が大部分を占めている。

第1表 発掘届出件数月別一覧表

(平成11年1月~12月)

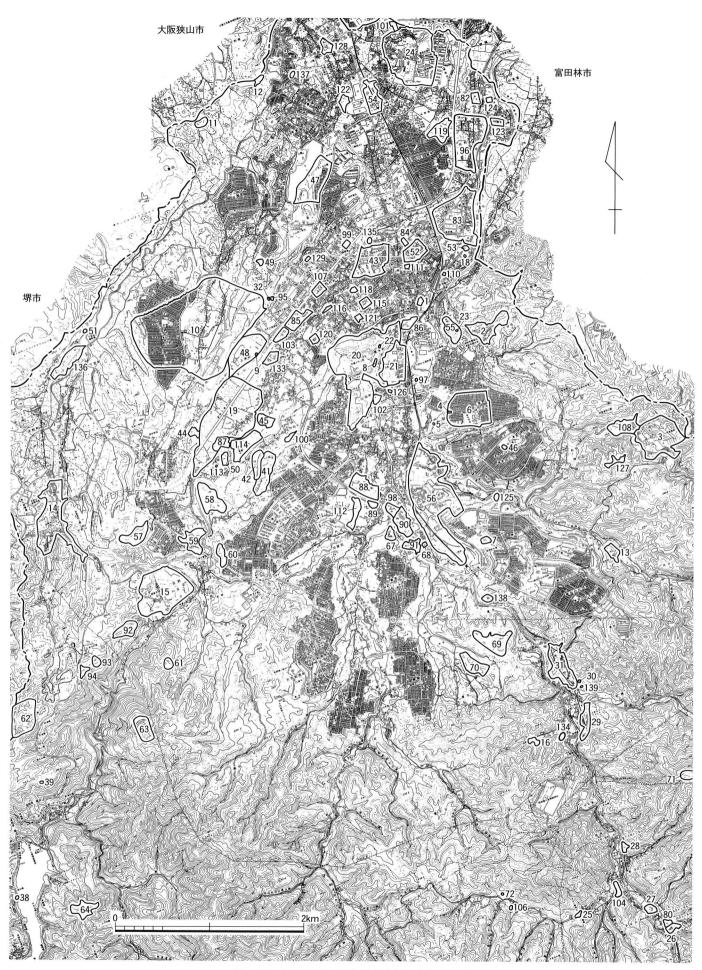
平成10年度				平成11年度								総計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1576A
発 掘 届(57条の2)	10	5	11	22	19	12	10	5	10	17	9	22	152
発掘通知(57条の3)	0	0	3	0	3	2	1	1	7	1	1	1	20
発 見 届(57条の5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
発見通知(57条の6)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第2表 主な発掘調査一覧表

(平成11年1月~12月)

調査期間	申請者	申請面積	用途	種別	区 分	備考
0.12.07 H11.02.05	三井不動産建設㈱	3199.98m²	宅地造成	調査	原因者	本書掲載
1.01.11	河内長野市	約9m²	公民館	調査	公共	遺構・遺物なし
1.01.14	河内長野市	2027.93m²	防火水槽	立会		遺構・遺物なし
1.02.09	個人	513.88m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.02.09	個人	152.80m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.02.09	個人	119.61 m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.02.09	個人	80.00m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.02.09	松原建設(株)	499.00m²	分譲住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.02.10 H11.08.06	宗天野山金剛寺	約120m²	防災事業	調査	原因者 • 国庫	中世の掘立柱建物・近世の石組 を検出 古墳時代・中近世の土器が出土
1.02.22	個人	336.60m²	専用住宅	立会		遺構・遺物なし
1.02.25	(株)生晃社	661.19m²	事務所	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.03.01	個人	395.64 m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.03.11 H11.03.24	宗日本基督教団	722.83m²	教会	調査	原因者	本書掲載
1.04.06	個人	185.74m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.04.07	個人	200.09m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
1.04.08	個人	139.00m²	店舗	調査	原因者	遺構・遺物なし
11.04.20	大阪府	約1000m²	農道	調査	公共	中世の墓・土坑、近世の建物跡 を検出
H11.05.21						中世・近世の陶磁器が出土
11.04.26	個人	229.88m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
11.04.28	個人	231.12m²	専用住宅	立会		遺構・遺物なし
11.04.30	個人	88.29m²	専用住宅	立会		遺構・遺物なし
11.05.13	(社福)川上会	69.42m²	保育園	立会		包含層から近世の遺物が出土
11.05.28	アイフルホーム	98.04m²	分譲住宅	立会		遺構・遺物なし
11.06.01	個人	105.50m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
11.06.01	個人	123.56m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
	0.12.07 H11.02.05 1.01.11 1.01.14 1.02.09 1.02.09 1.02.09 1.02.09 1.02.10 H11.08.06 1.02.22 1.02.25 1.03.01 1.03.11 H11.03.24 1.04.06 1.04.07 1.04.08 1.04.20 H11.05.21 1.04.28 1.04.28 1.04.30 1.05.13 1.05.28 1.06.01	2.12.07 111.02.05 三井不動産建設(株) 1.01.11 河内長野市 1.01.14 河内長野市 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.10 日本 1.02.10 日本 1.02.22 日本 1.03.01 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	三井不動産建設 3199.98m² 11.02.05 1.01.11 河内長野市 約9m² 1.02.09 個人 152.80m² 1.02.09 個人 152.80m² 1.02.09 個人 119.61m² 1.02.09 個人 119.61m² 1.02.09 個人 119.61m² 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.09 個人 1.02.10 1.02.10 1.102.22 個人 336.60m² 1.02.22 個人 336.60m² 1.02.25 (株生見社 661.19m² 1.03.01 個人 395.64m² 1.03.11 (計日本基督教団 722.83m² 1.04.06 個人 185.74m² 1.04.07 個人 200.09m² 1.04.08 個人 139.00m² 1.04.20 大阪府 約1000m² 1.04.20 大阪府 約1000m² 1.04.26 個人 229.88m² 1.04.28 個人 231.12m² 1.04.30 個人 88.29m² 1.05.13 (社福)川上会 69.42m² 1.05.28 アイフルホーム 98.04m² 1.05.50m² 1.06.01 個人 105.50m²	2.12.07	1.12.07	3199.98m² 宅地造成 調査 原因者 1.01.02.05 1.01.11 河内長野市 2027.93m² 防火水槽 立会 1.02.09 個人 152.80m² 専用住宅 調査 原因者 1.02.09 個人 119.61m² 専用住宅 調査 原因者 1.02.09 個人 80.00m² 専用住宅 調査 原因者 1.02.09 松原建設(株) 499.00m² 分譲住宅 調査 原因者 1.02.10 (宗天野山金剛寺 約120m² 防災事業 調査 原因者 1.02.10 (宗天野山金剛寺 1.02.22 個人 336.60m² 専用住宅 ご会 1.02.25 (株生晃社 661.19m² 事務所 調査 原因者 1.03.01 個人 395.64m² 専用住宅 調査 原因者 1.03.01 (宗日本基督教団 722.83m² 教会 調査 原因者 1.04.06 個人 185.74m² 専用住宅 調査 原因者 1.04.07 個人 200.09m² 専用住宅 調査 原因者 1.04.08 個人 139.00m² 店舗 調査 原因者 1.04.08 個人 139.00m² 唐相住宅 コュー コュー カーム・シー 大阪府 約100m² 農道 京日者 1.04.20 大阪府 229.88m² 専用住宅 立会 1.04.28 個人 229.88m² 専用住宅 立会 1.04.28 個人 229.88m² 専用住宅 立会 1.04.20 個人 88.29m² 専用住宅 立会 1.04.20 個人 88.29m² 専用住宅 立会 1.05.13 (社福)川上会 69.42m² 保育園 立会 1.05.13 (社福)川上会 69.42m² 保育園 立会 1.05.28 アイフルホーム 98.04m² 分譲住宅 立会 1.06.01 個人 105.50m² 専用住宅 調査 原因者 1.06.01 個人 105.50m² 専用住宅 コュー 1.05.13 (社福)川上会 69.42m² 保育園 立会 1.06.01 個人 105.50m² 専用住宅 コュー 1.05.13 (社福)川上会 1.05.50m² 1.05.50m² 1.05.50m² 1.05.50m² 1.05.50m² 1.05.50m² 1.05.50m² 1.05.50m² 1.05.50m² 1

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積	用 途	種別	区分	
	H11.06.01	個人	123.56m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
	H11.06.07	(宗)烏帽子形八幡神 社	3643.66m²	社務所	調査	原因者	遺構・遺物なし
	H11.06.21~		%√15000m²	ポンプ場	調査	公共	調査中
	H11.07.01	個人	163.49m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
	H11.07.02	個人	217.17m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
	H11.07.08	個人	256.44m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
	H11.07.09		約20m²	下水道	立会	///KA/TI	遺構・遺物なし
710 110 110 110	H11.07.19	個人	231.10m ²	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
西代藩陣屋跡	H11.07.22	河内長野市	約17675m²	中学校	調査	公共	遺構・遺物なし
四代個件座员	~H11.08.20	1.01 1771 10	#311010III	1 7 12	W-J-EL.	47	ASIM ASIM CO
西浦遺跡	H11.07.27	個人	549.33m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
三日市遺跡	H11.07.29	個人	171.55m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
観心寺遺跡	H11.08.02 ~H11.08.31	大阪府	165.16m²	駐在所	調査	公共	溝・井戸・土坑・ピットを検出 中近世の土器が出土
塩 谷 遺 跡	H11.08.04	個人	170.22m²	専用住宅	立会		遺構・遺物なし
河合寺城跡	H11.08.09	学校法人清教学園	57801 m²	学校	調査	原因者	遺構・遺物なし
三日市遺跡	H11.08.18	個人	279.49m³	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
天野山金剛寺遺跡	H11.08.20	個人	956.83m²	分譲住宅	調査	原因者	中世の石列・ピットを検出 中世の瓦器が出土
高 向 遺 跡	H11.08.31	個人	361.97 m²	専用住宅	調査	国庫	遺構なし 須恵器片・陶器片が出土
塩谷遺跡	H11.09.07	個人	84.07m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
栄町東遺跡	H11.09.14	個人	297.52m²	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
東高野街道	H11.09.17	個人	108.00m²	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
市町東遺跡	H11.09.24 ~H11.10.08	個人	13.80m²	専用住宅	調査	原因者	本書掲載
膳所藩代官所跡	H11.10.07	河内長野市	約12m²	道路	立会		遺構・遺物なし
市町東遺跡	H11.10.13	個人	69.32m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
松林寺遺跡	H11.10.14	個人	149.96m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
松林寺遺跡	H11.10.14	個人	106.08m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
松林寺遺跡	H11.10.14	個人	104.66m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
松林寺遺跡	H11.10.14	個人	163.01 m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塩谷遺跡	H11.10.15~	国立大阪南病院	2797.00m²	病院	調査	原因者	調査中
加塩遺跡	H11.10.26 ~H11.11.11	㈱富士木材	5711.59m²	分譲住宅	調査	原因者	本書掲載
高向遺跡	H11.10.29	個人	629.80m²	専用住宅	立会		遺構・遺物なし
尾崎遺跡	H11.11.01	個人	217.00m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	H11.11.04	辰巳住宅	151.75m²	分譲住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塩谷遺跡	H11.11.10	個人	86.30m²	専用住宅	立会		遺構・遺物なし
松林寺遺跡	H11.11.11	(宗)松林寺	194.31 m²	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
高向遺跡	H11.11.29	個人	129.58m²	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
三日市遺跡	H11.12.02	個人	193.72m²	専用住宅	調査	原因者	本書掲載
三日市遺跡	H11.12.07	個人	111.62m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
三日市遺跡	H11.12.07	個人	112.14m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
太 井 遺 跡	H11.12.07 ~H11.12.09	河内長野市	約30m²	農道	調査	公共	中世の溝・土坑・ピットを検出 中世の土器が出土
菱 子 尻 遺 跡	H11.12.10	㈱テック建設	292.70m²	店舗	調査	原因者	遺構・遺物なし
高 野 街 道	H11.12.13	個人	516.39m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塩 谷 遺 跡	H11.12.17	個人	85.07m²	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
高 野 街 道	H11.12.24	富士川日本繊化㈱	439.36m²	倉庫	調査	原因者	遺構・遺物なし



第1図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)

30% E2	`# DL # #	2015 AND T	時 代		18 Dt 67 St.	45 45	時代
番号	遺跡名称	種類		番号	遺跡名称	種類	, , ,
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降	71	旗 尾 城 跡	城館	中世
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降	72	葛 城 第 16 経 塚	経塚	平安以降
3	観 心 寺 遺 跡	社寺	平安以降	(73)	葛 城 第 18 経 塚	経塚	平安以降
4	大師 山 古墳	古墳	古墳(前期)	(74)	葛 城 第 19 経 塚	経塚	平安以降
5	大師山南古墳	古墳?	古墳 (後期)	(75)	笹 尾 塞	城館	中世
6	大師 山遺跡	集落・生産	弥生(後期)・平安	(76)	大 沢 塞	城館	中世
7	興 禅 寺 遺 跡	社寺	中世以降	(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降	(78)	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳(後期)・近世	(79)	猿 子 城 跡	城館	中世
10	長 池 窯 跡 群	生産	平安~近世	80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良	(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
12	小山田 2 号古墓	墳墓	奈良	82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降	83	向 野 遺 跡	集落・生産	縄文•平安~近世
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降	84	古野町遺跡	散布地	中世
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	平安~中世	85	上原北遺跡	集落	中世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降	86	大 日 寺 遺 跡	社寺·古墳·墳墓	弥生~中世
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降	87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
				1			縄文~中世
18	五ノ木古墳	古墳	古墳(後期)	88	小塩遺跡	集落	
19	高向遺跡	集落	旧石器~中世	89	加塩遺跡	集落	古墳(後期)
20	烏帽子形城跡	城館	中世~近世	90	尾崎遺跡	集落	古墳~中世
21	喜 多 町 遺 跡	集落	縄文・古墳〜中世	91	ジョウノマエ遺跡	城館?	中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳(後期)	92	仁 王 山 城 跡	城館	中世
23	末 広 窯 跡	生産	中世	93	タコラ城跡	城館	中世
24	塩 谷 遺 跡	散布地	縄文~中世	94	岩 立 城 跡	城館	中世
25	流谷八幡神社遺跡	社寺	平安以降	95	上原近世瓦窯	生産	近世
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世	96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世	97	上田町窯跡	生産	近世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世	98	尾崎北遺跡	集落	古墳~中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世	99	西之山町遺跡	散布地	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降	100	野間里遺跡	集落	平安
31	清 水 遺 跡	散布地	中世	101	鳴尾遺跡	散布地	中世
			中區			散布地	古墳・中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳?	Set III.	102			
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世	103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
(34)	滝 畑 埋 墓	墳墓	近世	104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世	(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世	106	薬 師 堂 跡	社寺	中世以降
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世	107	野作遺跡	生産	中世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世	108	寺 元 遺 跡	集落・社寺	奈良•中世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世	(109)	鳩 原 遺 跡	散布地	中世
(40)	宮の下内墓	墳墓	近世	110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
41	宮 山 古 墳	古墳	古墳	111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
42	宮 山 遺 跡	集落	縄文・奈良	112	西 浦 遺 跡	集落	古墳・中世・近世
43	西代藩陣屋跡	散布地・城館	飛鳥~奈良・江戸	113	地 福 寺 跡	社寺	近世
44	上原町墓地	墳墓	近世	114	宮の下遺跡	集落	平安~中世
45	惣 持 寺 跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉	115	栄 町 遺 跡	散布地	弥生・古墳・中世
46	栗山遺跡	祭祀	中世~近世	116	錦町遺跡	散布地	中世
47	寺ケ池遺跡	散布地	縄文	(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
						44	弥生・中世・近世
48	上原遺跡	散布地	旧石器~近世	118		集落	縄文・中世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降	119	市町西遺跡	集落	
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降	120	栄町南遺跡	集落	中世
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降	121	栄 町 東 遺 跡	散布地	弥生・中世
. 52	膳所藩代官所跡	城館	江戸	122	楠町東遺跡	散布地	弥生
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳	123	沙の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
54	菱 子 尻 遺 跡	散布地・社寺	縄文~近世	124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
55	河合寺城跡	城館	中世	125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器~近世	126	増福寺遺跡	社寺	中世以降
57	日 の 谷 城 跡	城館	中世	127	三昧城遺跡	墳墓•城館	中世・近世
58	高木遺跡	散布地	縄文	128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
59	汐の山城跡	城館	中世	129	昭栄町遺跡	散布地	中世
60	峰 山 城 跡	城館	中世	*130	東高野街道	街道	平安以降
61	稲荷山城跡	城館	中世	*131	西高野街道	街道	平安以降
62	国見城跡	城館	中世	*132	高野街道	街道	平安以降
63	旗藏城跡	城館	中世	133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
64	権現城跡	城館	中世	134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	鎌倉
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降	135	本多町北遺跡	散布地	中世
							古墳・中世
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降	136	下里町遺跡	散布地	
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降	137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
68	庚 申 堂 遺 跡	社寺	近世以降	138	岩瀬北遺跡	集落	中世
69	石 仏 城 跡	城館	中世	139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
70	佐 近 城 跡	城館	中世				

() は地図範囲外 * は街道につき地図上にプロットせず

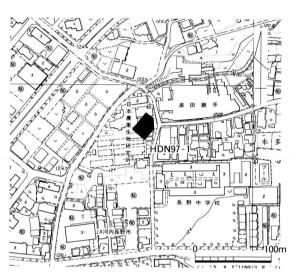
第3表 河内長野市遺跡地名表

第2章 調査の結果

第1節 本多町北遺跡 (HDN97-1)

1 概略

本遺跡は、店舗建設等の開発行為に先立ち、開発者と市教育委員会との協議の結果、平成9年10月に市教育委員会によって試掘調査が実施され、新規に発見されたものである。遺跡名はその所在地により命名した。この新規発見に基づき、再度この遺跡の取り扱いについて開発者と市教育委員会とで協議した結果、この開発行為によって破壊される約850㎡について本調査を実施することとなった。



第2図 調査区位置図 (1/5000)

行政上、調査地は河内長野市本多町4

-33他に該当する。調査は平成9年12月22日から平成10年2月28日まで実施した。

2 層序

調査区の基本層序は表土(層厚0.2m)、床土(同0.05m)、褐色シルト(同0.1m)、灰白色シルト混じり極細砂(同0.15m)、地山となっていた。遺物等の出土は褐色シルト以下の層からであった。

調査の結果、石垣や畑の畦畔、溝などを検出した。

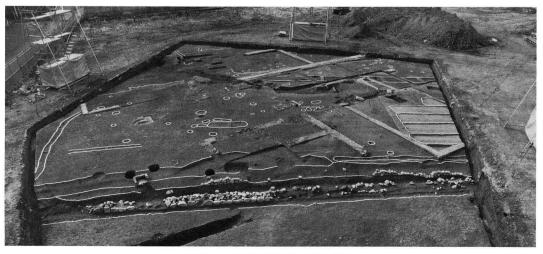


写真1 調査区近景(北から)

3 遺構と遺物

(1) 溝

[SD1] (写真3)

調査区の南西側で検出された。北西から南東に直線的に約15m走る。北西側は調査区外に延びる。幅1.42m、深さ0.06mを測る。軸方向はN-80°-Wを示す。埋土は灰白色シルト混じり極細砂であった。

この遺構は、畦畔より下層で検出され、層序的には、石垣(SW1)が構築されていた時期に相当する。

遺物は出土しなかった。

(2) 耕作地(写真3)

調査区の北西側で、畦畔状遺構に囲まれた畑と思われる遺構が北東から南西に5面並列して検出された。南西側は調査区外に広がる。

$\lceil SG1 \rceil$

平面形は長方形で検出長3.4m、幅1.28m、深さ0.3mを測る。主軸方向はN-80°-Wを示す。埋土は黄褐色礫混じり粘土であった。

遺物は出土しなかった。

畦畔内からは明確な時期は限定できないが、中世土師質土器片が出土した。

$\lceil S G 2 \rceil$

平面形は長方形で検出長3.72m、幅1.52m、深さ0.2mを測る。主軸方向はN-80°-Wを示す。埋土は黄褐色礫混じり粘土であった。

遺物は出土しなかった。

[SG3]

平面形は長方形で検出長4m、幅1.5m、深さ0.3mを測る。主軸方向は $N-80^{\circ}-W$ を示す。埋土は黄褐色礫混じり粘土であった。

遺物は出土しなかった。

$\lceil SG4 \rceil$

平面形は長方形で検出長4.48m、幅1.32m、深さ0.3mを測る。主軸方向はN-80°-Wを示す。埋土は黄褐色礫混じり粘土であった。

遺物は出土しなかった。

[SG5]

平面形は長方形で検出長 1.98m、幅1.46m、深さ0.3mを測る。主軸方向はN-80° -Wを示す。埋土は黄褐色礫混じり粘土であった。

遺物は出土しなかった。

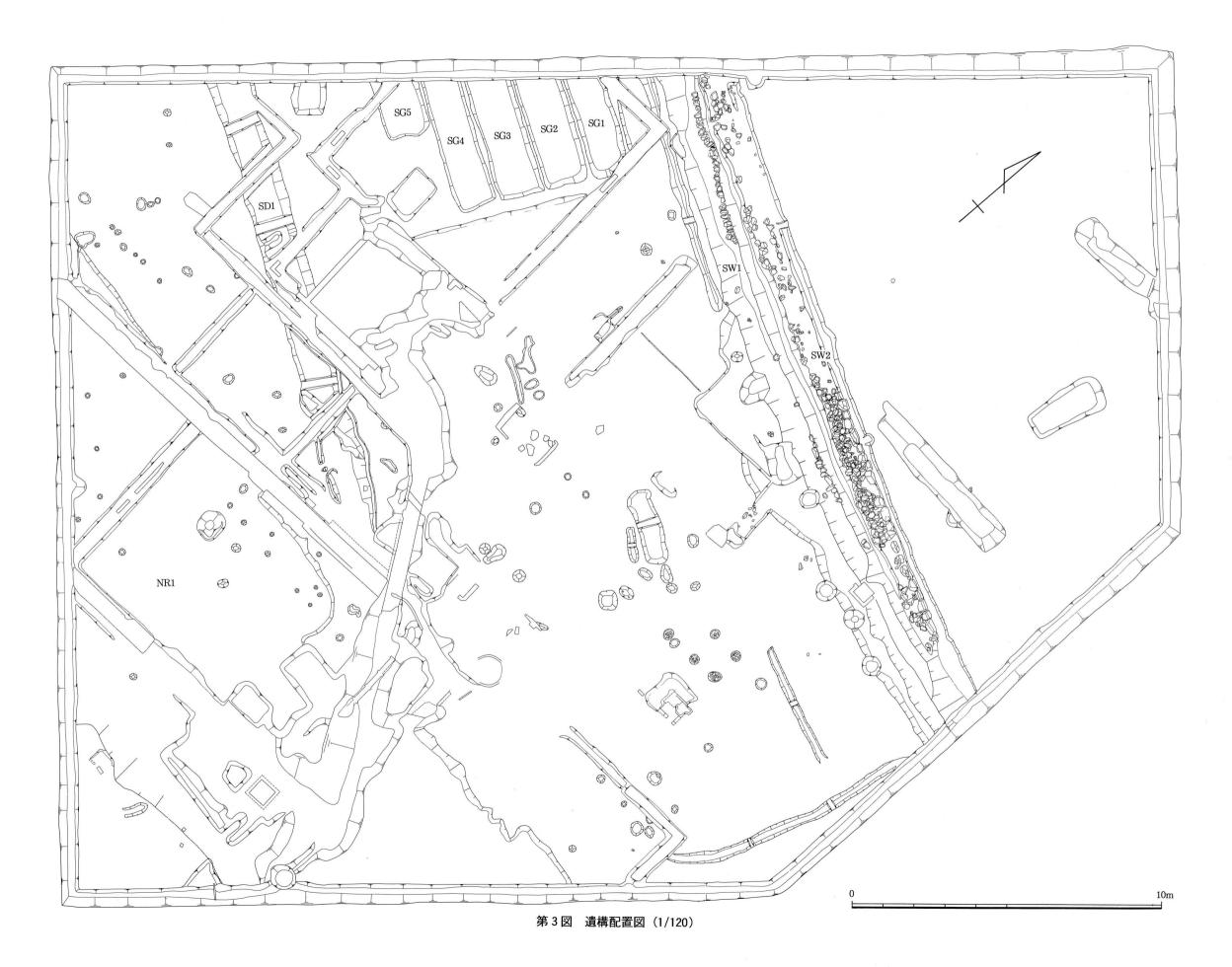




写真2 調査区全景(南から)



写真3 SD1、SG1~5、NR1 (西から)

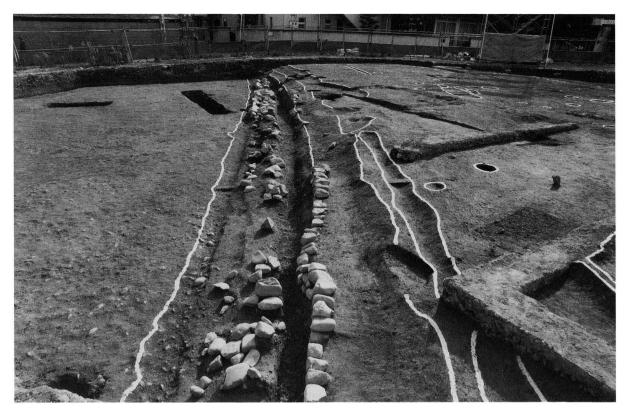


写真4 SW1・2 (西から)

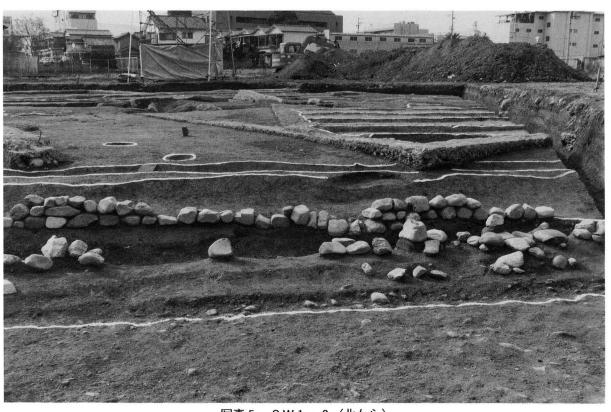


写真5 SW1・2 (北から)

これらを画する畦畔は、灰白色シルト混じり極細砂と黄褐色粘土をベースとしており、 断面形は台形から三角形を呈する。底面幅0.4m、上面幅0.15m、高さ0.3mであった。 畦畔内から土師質土器細片が出土した。

(3) 石垣

調査区の北側は北端から約16mのところで、約1m低くなっている。この段差は72° 西に振りながら約22.5m検出された。この段差に2段に分けることのできる石垣が検出された。

「SW1] (写真4·5)

上段の石垣である。調査区の西端から約5 mとそれから6.5m離れて約2 m検出された。石材は最大 $40\times30\times30$ cm の亜角の川原石を使用し、2 段の築造部分で高さ約0.4m残存していた。

SW1は、SW2より層序的に下層になる。SW1の北側は土層断面に暗青灰色粘土層が観察されることから、遺構が構築された時点では湿地を成していたようである。

遺物は出土しなかった。

[SW2] (写真4·5)

下段の石垣である。調査区の東端から 2 mのところで約8.4m検出された。石材は SW 1 よりやや大きく、最大 $60 \times 30 \times 30$ cmの亜角の川原石を使用し、基底の 1 段分が残存していた。この石垣には裏込めの小石が幅0.6mで詰められていた。小石は最大 $20 \times 15 \times 15$ cm 程度であった。 SW2 は SW1 より層序的に上層になり、 SW2 が構築された時点では遺構の北側は耕地を成していたようである。

遺物は出土しなかった。

(4) 自然流路

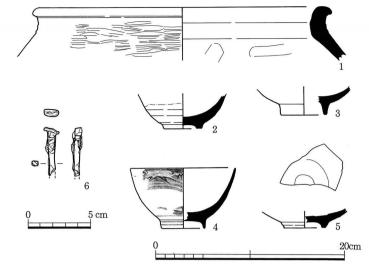
[NR1] (写真3)

調査区の南側で、西から東に走る自然流路と考えられる遺構が検出された。検出規模は 長さ26m、最大幅9.6m、深さ0.1mを測る。

遺物は出土しなかった。

(5) 包含層(第4図、写真6)

床土及び包含層から中世の瓦質土器、唐津の埦、丹波の擂鉢、備前の擂鉢、瀬戸の天目 茶碗、肥前系の染付碗、瓦や鉄釘が出土した。大部分は細片のため実測が不可能であった が、外面に平行タタキが施された玉縁口縁の瓦質甕(1)、体部上半が欠損した唐津の埦 (2)、肥前系の染付碗(4)、体部上半が欠損した青磁碗(3)、内面底部に蛇の目釉ハギが 見られる陶器の皿(5)が実測できた。また鉄製品では、釘(6)が実測できた。



第4図 包含層出土遺物実測図

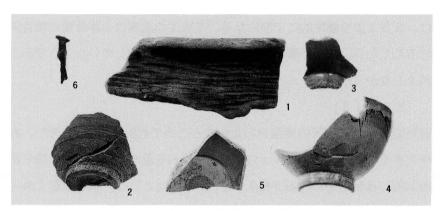


写真 6 包含層出土遺物

4 まとめ

今回の調査の結果、中世の耕作地及び溝そして近世の石垣等が検出された。

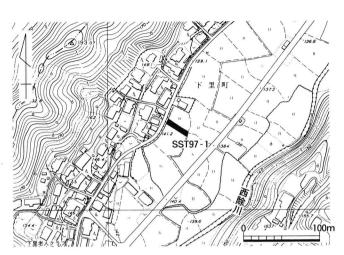
石垣によって1段下がった部分は瓜生野原の小字名があり、上段の畑状の遺構がある部分は大畝丁の小字名が残っている。この調査地の北方には東に流れる谷川とそれによって形成された小谷がある。この谷の起点がこの調査区付近となる。1段下がった爪生野原は、小谷が形成された段丘上の開析谷の一部と思われる。この低地の地形を利用してため池などが築堤されている。調査区の北側は桜池と呼ばれたため池の跡地である。

現在、平坦面に見られる石川の左岸に広がった中位から低位の段丘面上には、北東に走る埋没谷や石川に向かって走る埋没谷や小谷があり、これらの谷の一部を堰き止めてため 池が築堤されている。これらも、開発とともに姿を消してゆき現在の地形と成っている。

当調査区もこのような農業生産に関わるものと思われる。

尾谷

第2節 下里町遺跡(SST97-1)



第5図 調査区位置図(1/5000)

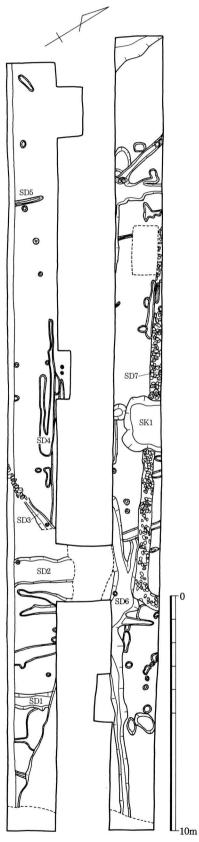
1 位置と環境

当該遺跡は、岩湧山系を水源とする西除川の左岸に位置し、当該調査区は下里町に位置する。西側には堺市域が近接している。標高は約140mである。北側0.2 kmには青が原神社遺跡、東側0.5kmには平安時代から近世の炭焼窯の長池窯跡群、南側1kmの西除川の上流には天野山金剛寺遺跡が位置している。当該調査は市道の建設に伴う試掘調査で新規発見し、下里町遺跡と命名した。発掘調査は工事の擁壁等の切土により、影響を受ける範囲を対象に調査区を設定し、平成10年2月3日から2月20日まで実施した。調査面積は約140㎡である

2 層序

基本層序は、耕土(層厚0.2m)、7.5YR6/3にぶい褐 色礫混じり粗砂(同0.15m)、床土(同0.1m)、10YR 6/3にぶい黄橙色細砂混じりシルト(同0.15m)、地山 は10YR5/6黄褐色細砂混じりシルトであった。

調査の結果、溝、土坑、ピット、自然流路を検出した。溝と土坑からは遺物が出土した。



第6図 遺構配置図(1/160)

3 遺構と遺物

(1) 溝

[SD1]

SD1は調査区の南側に位置する。溝の北端は切られ、南端は調査区外に及ぶため、平面形や規模の詳細は不明である。検出規模は長さ1.48m、幅0.76m、深さ0.41mを測る。軸方向はN-28°-Eである。

遺物は瓦器の埦、磁器の碗が出土したが、細片のため図化できなかった。

[SD2] (写真8)

SD2はSD1の北西5 mに位置する。溝の南端は調査区外に及び、北端は攪乱されているため詳細は不明である。検出規模は長さ2.5m、幅1.1m、深さ1 mを測る。軸方向は $N-30^{\circ}-E$ である。

遺物は土師質土器の皿、瓦質土器、常滑の甕、丸瓦が出土したが、細片のため図化できなかった。

「SD3] (写真8)

SD3はSD2の北西1.1mに位置し、軸方向はN-80°-Eである。溝の東端は攪乱され、西端は調査区外に及ぶため、平面形や規模の詳細は不明である。検出規模は長さ3.4m、幅0.45m、深さ0.07mを測る。遺構の西側には川原石が遺存していた。構築時は溝全体に川原石が詰められ、暗渠として機能していたと考えられる。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

 $\lceil SD4 \rceil$

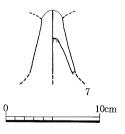
SD4はSD3の北側1.5mに位置する。溝は北西軸の平行する2本が南東端で連結し、 U字形を呈する。遺構の規模は長さ5.76m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。

遺物は土師質土器、瓦が出土したが細片のため実測できなかった。

[SD5] (第7図、写真9)

SD5はSD4の北西5 mに位置する。軸方向は $N-20^{\circ}-E$ である。溝の南端は調査区外に及ぶため、平面形や規模の詳細は不明である。検出規模は長さ1.2m、幅0.2m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師器の高坏の脚部(7)が出土した。



第7図 SD5出土遺物実測図

[SD6]

SD6はSD2の北側1.5mに位置する。軸方向は $N-62^\circ-W$ である。溝の西端は調査区外に及び、東端は攪乱されているため、平面形や規模の詳細は不明である。検出規模は長さ13.64m、幅1.24m、深さ0.16mを測る。

遺物は須恵器の壺、土師器、土師質土器、須恵質土器の練鉢、瓦器の埦、瓦質土器の火 鉢・練鉢、磁器、常滑焼、瓦が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。



写真7 調査区全景(東から)

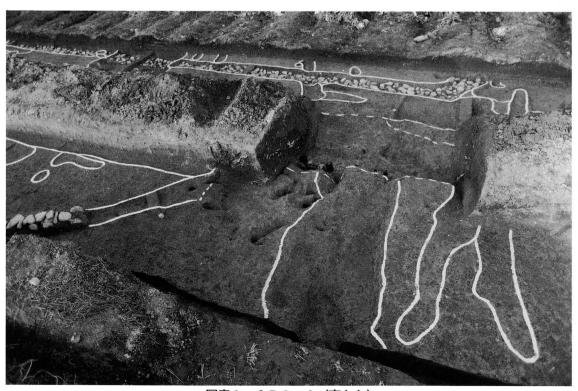


写真8 SD2・3 (南から)

$\lceil SD7 \rceil$

 $SD7は SD6 に南東端を接する。軸方向は <math>N-55^{\circ}-W$ である。溝の両端は調査区外に及ぶため、平面形や規模の詳細は不明である。検出規模は長さ16.8m、幅0.72m、深さ0.08mを測る。遺構は全体に川原石が詰められ、暗渠として機能していたようである。遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

$\lceil S K 1 \rceil$

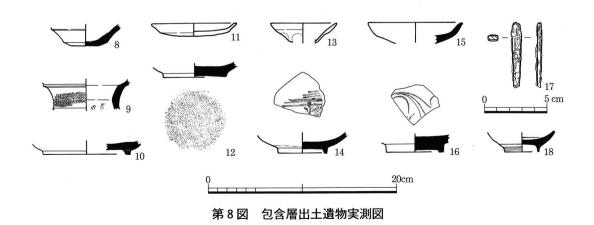
SK1はSD7の中央部に位置し、SD7を切っている。遺構の北側は調査区外に及ぶため、詳細な平面形や規模は不明である。検出規模は長軸2.38m、短軸1.65m、深さ0.12mを測る。

遺物は須恵器の壺、土師質土器、瓦器の埦、瓦質土器の甕、火鉢、須恵質土器の練鉢が 出土したが、細片のため実測できなかった。

(3) 包含層(第8図、写真9)

4 まとめ

調査の結果、ピットや溝を検出したが建物の復原にまでは至らなかった。しかし、包含層からではあるが、古墳時代の須恵器や土師器が出土し、試掘当初予想された中世遺跡という時代設定より、人々の営みが遡ることが確認できた。



調査区の西方 1 ㎞に位置する天野山金剛寺遺跡の最近の調査(KGT98-1・未報告)で、奈良時代に寺院が開創される以前にあたる、古墳時代の須恵器の坏身が出土している。 古墳時代において二つの遺跡の間にどんな関連があったのか。今後の調査例の増加が待たれる。

鳥羽

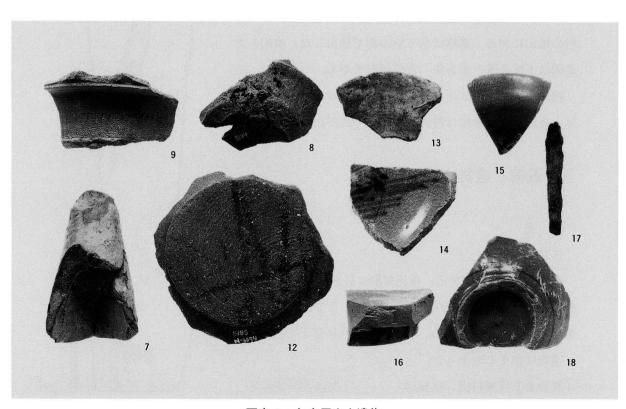
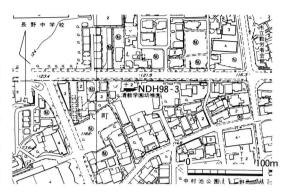


写真 9 包含層出土遺物

第3節 西代藩陣屋跡(NDH98-3)

1 位置と環境

西代藩陣屋跡は石川左岸の中位段丘上に 位置する。当遺跡は近世の西代藩時代の遺 構の他に飛鳥・奈良時代の遺構も確認され ている複合遺跡である。西代藩は近江膳所 藩から分かれた本田忠統を藩主としたもの で、1711年から1732年の21年間にわたり西 代村に陣屋をおいた。領地はその後幕領に なり、明治には畑地として利用された。



第9図 調査区位置図 (1/5000)

2 概略

本次調査は(宗)日本基督教団河内長野教会の増築工事に伴って、平成11年3月11日から同31日まで行われた。調査区は西代町10-19に位置し、南北2m、東西15.6m、面積31.2m²である。

調査区の層序は盛土(層厚 $0.3\sim0.4\mathrm{m}$)・黄褐色シルト層 (同 $0.1\sim0.2\mathrm{m}$)と続き、GL $-0.6\mathrm{m}$ のTP122.0mで明茶 色の地山に至る。遺構は全て地山面で検出した。検出した 遺構は土坑 3 基と溝 2 条、及び礎石である。

遺物は黄褐色シルト層の包含層より肥前系陶磁器、堺擂 鉢、唐津など18世紀以降の陶磁器類や瓦が出土している。

3 遺構と遺物

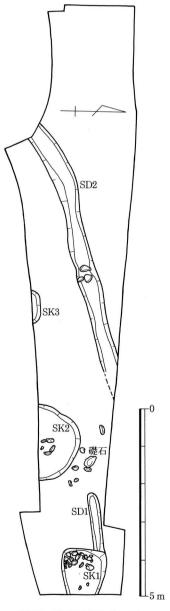
(1) 溝

[SD1]

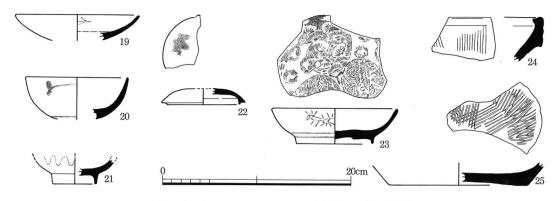
調査区東側に位置する。検出規模は長さ1.5m、幅0.3m、深さ0.06mを測る。軸方向はN-75°-Eである。遺構の東端はS K 1 に切られる。埋土は灰褐色砂質土であった。遺物は出土しなかった。

[SD2] (第11図、写真10)

調査区の中央を北東から南西へと走る。両端はいずれも



第10図 遺構配置図 (1/100)



第11図 SD2、SK1、包含層出土遺物実測図

調査区外へと延びる。軸方向は $N-70^\circ-E$ である。検出規模は長さ $7\,m$ 、最大幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は浅い部分は黒褐色シルトの単層、深い部分は黒褐色シルトと灰黄褐色シルトの二層であった。

遺物はコバルト顔料によって染め付けられた明治期の磁器の皿(23)が出土した。

(2) 土坑

[SK1] (第11図、写真10)

SK1は調査区の東端に位置する。隅丸方形を呈し、東側は調査区外へ延び、西側は SD1を切っている。検出規模は一辺1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は灰黄褐色シルトで こぶし大の礫が多量に混入していた。

遺物は18世紀代の堺擂鉢(25)が出土した。

SK2

調査区東側の南端に位置する。楕円形を呈し、遺構の南側半分は調査区外に延びる。検出規模は長径2m、短径1.1m、深さ0.07mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。10~20cmの礫を多く含む。

遺物は出土しなかった。

[SK3]

調査区中央の南端に位置する。大部分は調査区外へと延びる。検出規模は長軸0.8m、

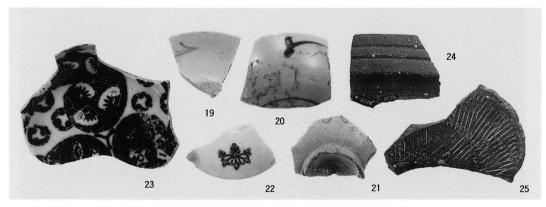


写真10 SD2、SK1、包含層出土遺物

西代藩陣屋跡

短軸0.1m、深さ0.1mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単層であった。 遺物は出土しなかった。

(3) 礎石

調査区の東側、SK2の北側で検出された。長辺35cm、短辺20cm、厚み14cmの扁平な礎石である。明確な堀形は認められなかったことから、地面に直接礎石を設置したものと考えられる。

(4) 包含層(第11図、写真10)

包含層から肥前系陶磁器、堺擂鉢、唐津など18世紀以降の陶磁器類や瓦が出土した。 (19)は肥前系磁器の皿で口縁部径12㎝を測る。内面に草木文を施し、蛇の目釉ハギが見られる。(20・21)は肥前系磁器の碗で(20)は口縁部径10.6㎝を測る。(21)は下部に網目文が残る。(22)は肥前系磁器の蓋で口縁部径7.6㎝を測る。外面に桐のコンニャク印判文を施す。(24)は堺擂鉢の口縁部で1単位12条のスリ目を施す。

4 まとめ

本次調査で検出された遺構と遺物は江戸時代後半の18世紀以降のものが中心である。時期的に見れば西代藩陣屋が築かれた時期以降のものである。礎石建物の全体像は不明であるが、検出された礎石や溝は陣屋周辺の関係施設である可能性があり、その意義は大きい。

藤原



写真11 調査区全景(東から)

第4節 三日市遺跡 (MIC98-2)



第12図 調査区位置図 (1/5000)

1 位置と環境

当該遺跡は、金剛山系を水源とする天見 川と石川が合流して形成する河岸段丘の中 位段丘上に位置する。既往調査で三日市遺 跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺 跡であることが判明しており、当該調査地 は遺跡の中央部に位置する。三日市遺跡の 標高は約125mから150mである。三日市遺 跡の北東0.5kmには弥生時代の高地性集落 である大師山遺跡、同0.6kmには古墳時代 前期の大師山古墳、東0.3kmには寺院遺跡 の興禅寺遺跡、南東0.5kmには中世の集落 跡の岩瀬北遺跡、西側の天見川対岸には 0.3kmに小塩遺跡・西浦遺跡、0.2kmには尾 崎北遺跡、0.1kmには尾崎遺跡・ジョウノ マエ遺跡が位置している。

なお、本次調査は宅地造成および分譲住 宅の建設に先立ち実施した。調査期間は平 成11年1月11日から同2月5日までである。 調査区は中片添町1656他に所在する。

2 層序

調査は7m×26mの調査区を1カ所設定 し実施した。基本層序は盛土(層厚1.2m)、



第13図 遺構配置図 (1/120)

三日市遺跡

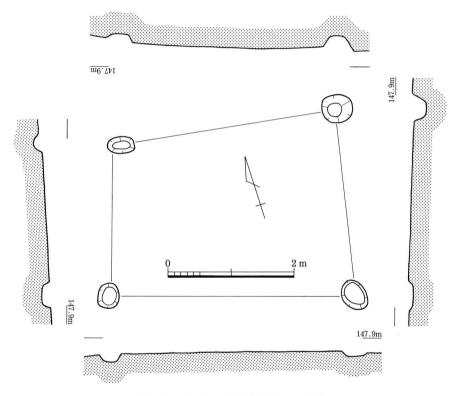
耕土(同0.15m)、5 YR6/1灰色シルト(同0.1m)、床土(同0.05m)、10YR6/3にぶい黄橙色シルト(同0.1m)であった。地山は黄橙色シルトであった。

調査の結果、建物、溝、土坑、ピット、土壙墓を検出した。溝と包含層から遺物が出土した。

3 遺構と遺物

(1) 建物

[SB1] (第14図)



第14図 SB1遺構実測図(1/60)

SB1は調査区の中央、北寄りに位置する。建物の構造は掘立柱建物で、平面形は不定形である。柱穴の規模から上部構造は簡易なものであると想像される。建物は桁行1間×梁行1間で、柱間は桁行3.22m、梁行2.48mを測る。柱穴の平面形は楕円形で、規模は長径 $0.34\sim0.5$ m、短径 $0.25\sim0.5$ m、深さ $0.05\sim0.18$ mを測る。

柱穴から遺物は出土しなかった。

(2) 溝

[SD1]

SD1 は調査区の東側に位置し、南北に走る。軸方向は $N-10^{\circ}-W$ である。溝の両端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。遺構の中には半裁していない竹が敷かれ、暗渠

の用途を持つものと見られる。検出規模は、長さ4.54m、最大幅0.32m、深さ0.27mを測る。

遺物は出土しなかった。



写真12 調査区全景(西から)

$\lceil SD2 \rceil$

SD2は調査区の南側に位置し、東西に走る。軸方向は $N-82^\circ-E$ である。溝の東端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。遺構の中には半裁していない竹が敷かれ、暗渠の用途を持つものと見られる。検出規模は長さ8.3m、最大幅0.31m、最深部0.17mを測る。

遺物は瓦器埦、常滑焼が出土したが、細片のため実測できなかった。

$\lceil SD3 \rceil$

SD3はSD2の南側2mで調査区の南西端に位置する。溝の両端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出規模は長さ3.6m、幅0.4m、深さ0.26mを測る。軸方向はN-81°-Eである。遺構内には礫が詰められ、暗渠としての用途を持つものと見られる。

遺物は出土しなかった。

$\lceil SD4 \rceil$

SD4 はSD3 の北側0.5mに位置し、SD3 とほぼ平行に走る。軸方向は $N-75^{\circ}-E$ である。溝の西端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出規模は長さ3.5m、最大幅0.3m、深さ0.02mを測る。

遺物は出土しなかった。

$\lceil SD5 \rceil$

SD5はSD4の北側1 mに位置し、SD3・4とほぼ平行に走る。軸方向はN-75° -Eである。溝の西端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出規模は長さ4.91 m、最大幅0.94 m、深さ0.02 mを測る。

遺物は土師質土器の皿、瓦器の埦、須恵質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SD6]

SD6はSD5の北側0.8mに位置し、SD5にほぼ平行に走る。軸方向は $N-80^{\circ}-E$ である。溝の西端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出規模は長さ3.18m、最大幅1.03m、深さ0.03mを測る。

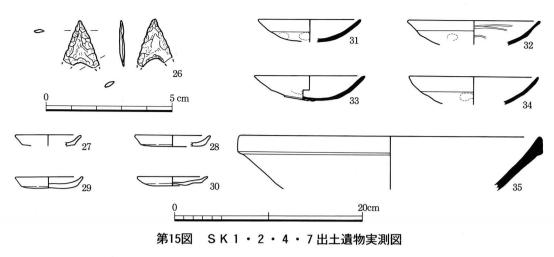
遺物は瓦器の埦、瓦質の土釜、青磁の碗が出土したが、細片のため実測できなかった。

(3) 土坑

[SK1] (第15図、写真13)

SK1は調査区の南側に位置し、SD2とSD5に切られている。遺構の南端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出規模は長軸1.59m、短軸1.23m、深さ0.08mを測る。主軸方向は $N-16^\circ-E$ である。遺構内には12cm角の礫が詰まっていた。

遺物は土師質土器の皿(27・29)、瓦器の埦(31~33)、焼土塊が出土した。



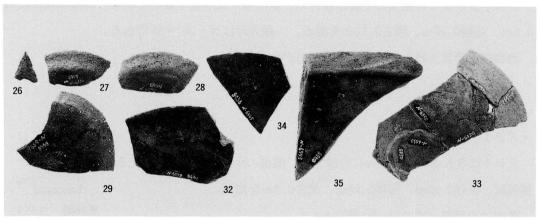


写真13 SK1・2・4・7出土遺物

[SK2] (第15図、写真13)

SK2はSK1の北側に近接して位置する。遺構の南端はSD5に切られているが、土層の観察から調査区の南側には及ばない。検出規模は長軸3.8m、短軸1.32m、最深部 0.09mを測る。主軸方向は $N-20^{\circ}-W$ である。

遺物は土師質土器の皿(28・30)・土釜、瓦器の埦、瓦質土器の鉢(35)、須恵質土器、備前焼が出土した。

$\lceil SK3 \rceil$

SK3はSK2の東側1mに位置する。遺構の平面形は不定形である。規模は長軸0.8m、短軸0.36m、深さ0.16mを測る。主軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。

遺物は土師質土器、瓦器、須恵質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SK4] (第15図、写真13)

SK4 は SK3 の北東側2.5mに位置する。遺構の平面形は不定形である。規模は長軸 0.72m、短軸0.45m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-25°-Wである。

遺物はサヌカイト製の石鏃(26)が出土した。

[SK5]

SK5はSB1に重複して検出された。遺構の平面形は不定形である。規模は長軸3.2

m、短軸2.0m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-18°-Wである。

遺物は土師質土器の皿、瓦器埦、瓦質土器の甕、須恵質土器の鉢、白磁碗、青磁碗、肥 前系磁器、瀬戸美濃の天目茶碗、陶器の堝が出土したが、細片のため実測できなかった。 [SK6]

SK6はSK5の北東側0.7mに位置し、東端がSD1に切られている。遺溝の平面形は不定形である。検出規模は長軸1.7m、短軸1.5m、深さ0.38mを測る。主軸方向は $N-19^\circ-W$ である。

遺物は土師質土器の皿、瓦器埦が出土したが、細片のため実測できなかった。

「SK7] (第15図、写真13)

SK7はSK6に重複して検出された。遺溝の平面形は不定形である。検出規模は長軸 0.6m、短軸0.32m、深さ0.11mを測る。主軸方向は $N-20^{\circ}-W$ である。

遺物は土師質土器の土釜、瓦器埦(34)が出土した。

(4) 遺物出土ピット

「SP1] (第16図)

SP1はSK1の東側1mに位置する。遺溝の平面形は楕円形である。規模は、長径<math>0.26m、短径0.24m、深さ0.3mを測る。



遺物は土師質土器の皿(36)が出土した。

第16図 SP1 出土遺物実測図

[SP2]

SP2はSP1の東側2.5mに位置する。遺構の平面形は南端が側溝に切られているが、 ほぼ楕円形と思われる。検出規模は長径0.24m、短径0.18m、深さ0.06 mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SP3]

SP3はSP2の東側0.8mに位置する。遺構の南北端がSD2と側溝に切られているため、詳細は不明である。検出規模は長軸0.2m、短軸0.18m、深さ0.07mを測る。

遺物は土師質土器、瓦質土器の土釜が出土したが、細片のため実測できなかった。

$\lceil SP4 \rceil$

SP4はSK4の南西側0.25mに位置する。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径 0.16m、短径0.14m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器の土釜が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SP5]

S P 5 は S P 4 の東側3.4mに位置する。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径 0.22m、短径0.13m、深さ0.24mを測る。

遺物は土師質土器、瓦器の埦、瓦質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。 [SP6] S P 6 は S P 5 の南東0.5mに位置する。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径 0.45m、短径0.26m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師質土器、瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SP7]

SP7はSP6の北側1.1mに位置する。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径0.2m、短径0.17m、深さ0.03mを測る。

遺物は土師質土器の土釜が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SP8]

SP8はSB1の東側1.2mに位置する。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径0.35m、短径0.32m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器の皿、瓦器埦が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SP9]

SP9はSK5の西端に接して位置する。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径 0.36m、短径0.28m、深さ0.04mを測る。

遺物は瓦器埦、青磁碗が出土したが、細片のため実測できなかった。

[S P10]

S P10はS K 6 の西側部分に重複して検出された。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径0.24m、短径0.14m、深さ0.04mを測る。

遺物は土師質土器の皿、瓦器埦が出土したが、細片のため実測できなかった。

[S P11]

S P11はS K 6 の中央部分に重複して検出された。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径0.28m、短径0.18m、深さ0.04mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

[S P12]

S P12はS K 6 の東側部分に重複して検出された。遺溝の平面形は楕円形である。規模は長径0.3m、短径0.21m、深さ0.03mを測る。

遺物は瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

(5) 土壙墓

[SR1] (写真14)

SR1はSK1の東側に接して検出された。遺構の西側の一部と、中央部は溝に切られている。遺構の平面形は隅丸の二等辺三角形を呈する。検出規模は長軸1.63m、短軸0.78m、最深部

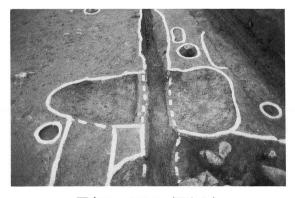


写真14 SR1 (西から)

0.16mを測る。主軸方向はN-7°-Wである。既往調査によって調査区周辺が墓地であることが分かっており、SR1も土壙墓と考えられる。

遺物は出土しなかった。

(6) 包含層(第17図、写真15)

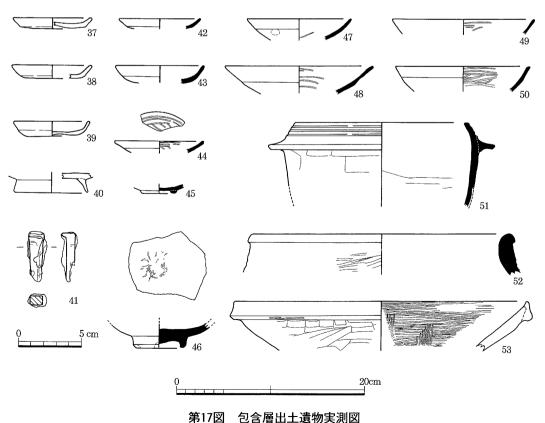
包含層からはサヌカイトの剝片、土師質土器の皿(37~39)・境(40)・擂鉢(53)・土釜・甕、瓦器の皿(42~44)・境(45・47~50)、瓦質土器の土釜(51)・甕(52)、須恵質土器の練鉢・甕、青磁碗(46)、堺擂鉢、肥前系陶器、肥前系磁器の碗、瀬戸美濃の碗・天目茶碗、灰釉陶器の皿、褐釉陶の堝、鉄釘(41)が出土した。

4 まとめ

調査の結果、掘立柱建物、土壙墓、暗渠、溝、多数の土坑及びピットを検出した。

既往の調査で、中世には調査区周辺は墓地になっていたことが判明している。本次調査でも、SR1のような墓壙と見られる遺構が確認され、墓域の資料が追加されたことは成果であった。

近世には、調査区は耕作地として利用されたらしく、SD1~3のような、農耕に伴うと見られる暗渠が検出された。かつて墓地として利用されていたことを知らない人々が耕作地を営んだと考えられる。



免17区 已合借山土退彻关州区

掘立柱建物は1棟だけであり、規模も簡易なことから、用途は耕作地に伴う建物であると考えられるが、具体的な復原には至らなかった。

本次調査の成果から、三日市遺跡における土地利用の方法や住民の移動が想起され、過去の開発の一端がうかがえる資料が得られた。

鳥羽

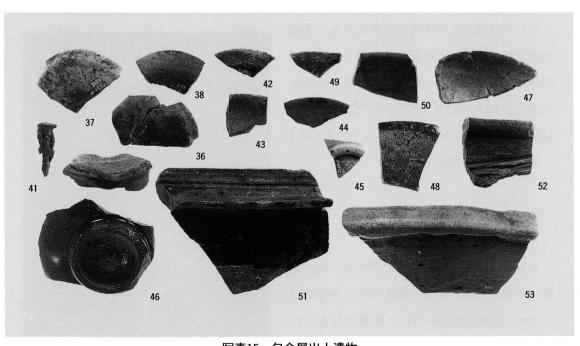
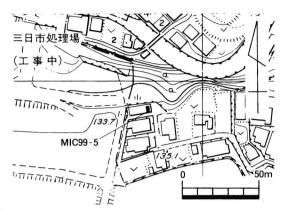


写真15 包含層出土遺物

第5節 三日市遺跡 (MIC99-5)

1 位置と環境

当該調査地は三日市遺跡の北部に位置し、 地形的には石見川左岸の中位段丘上に位置 する。標高は約136mである。行政上、調 査地は東片添町296に該当する。本次調査 は専用住宅の建設に伴う事前調査である。 調査は平成11年12月2日に行った。

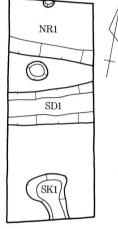


第18図 調査区位置図 (1/2500)

2 層序

調査は $1.2m \times 3$ mの調査区を1 カ所設定して実施した。基本層序は耕土(層厚0.15m)、床土(同0.05m)、5YR5/1褐灰色礫混じり細砂(同0.1m)であった。

遺構は溝、土坑、ピットを検出した。遺物は溝と包含層から出土した。



0 1 m

第19図 遺構配置図(1/50)

3 遺構と遺物

(1) 溝

$\lceil SD1 \rceil$

SD1は調査区の中央を東西に走る。両端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出規模は長さ1.2m、幅0.55m、深さ0.03mを測る。軸方向はN-80°-Eである。埋土は5YR3/3暗赤褐色礫混じりシルトであった。遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

[SK1]

SK1 は調査区の南端に位置する。検出規模は長軸1.15m、北側の幅0.55m、南側の幅0.3m、北側の深さ0.07m、南側の深さ0.15mを測る。主軸方向はN-21°-Wである。

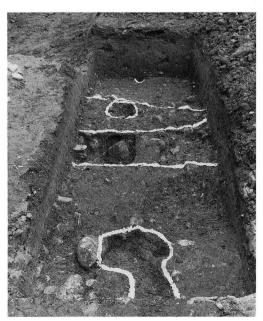


写真16 調査区全景(南から)

埋土は5YR3/3暗赤褐色礫混じりシルトであった。 遺物は出土しなかった。

(3) 落ち込み

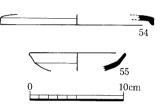
[NR1]

NR1は調査区の北端で検出された。調査地の地形はNR1の肩を境に北側を流れる石見川へと下がる。したがって、この肩は遺跡の北端部に相当する。検出規模は長さ1.15m、深さ0.22mを測る。埋土は5YR4/2灰褐色礫混じり細砂であった。

遺物は中世の瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

(4) 包含層(第20図)

包含層からはサヌカイトの剝片、奈良時代の須恵器の坏蓋(54)・甕、土師器、黒色土器A類の埦、黒色土器B類の埦、土師質土器の皿・埦・土釜、瓦器の皿(55)・埦が出土した。



第20図 包含層出土遺物実測図

4 まとめ

調査の結果、調査面積は狭小であるが遺跡の端部を検出できたことは成果であった。また、当地区の周辺は宅地造成のために一応の調査が終了しているものの、まだ未調査地も 多いため、小規模な開発といえども調査の欠かせない地域であることが再確認できた。

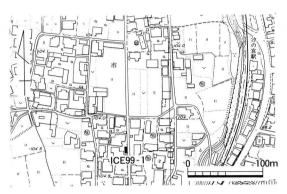
鳥羽

第6節 市町東遺跡 (ICE99-1)

1 位置と環境

当該遺跡は、岩湧山系を水源とする石 川左岸の中位段丘上に位置する。標高は 約136mである。北側0.5㎞に縄文時代・ 弥生時代・中世の塩谷遺跡、同じく0.3 ㎞に弥生時代~奈良時代の汐の宮町南遺 跡、西側0.1㎞に弥生時代~近世の市町 西遺跡が位置している。

行政上、調査区は市町401-1に該当 **第21図** する。調査期間は平成11年9月24日と同10月8日である。



第21図 調査区位置図 (1/5000)

2. 層序

調査は $2 \text{ m} \times 5.8 \text{ m}$ の調査区を1 カ所設定して実施した。基本層序は、耕土(層厚0.15 m)、床土(同0.05 m)、5 YR 5/1 褐灰色礫混じり細砂(同0.1 m)であった。

遺構は溝、土坑、ピットを検出した。遺物は溝と包含層から出土した。

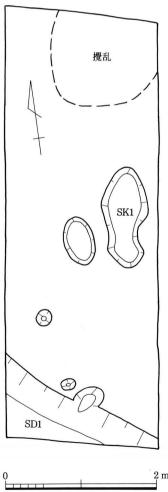
3 遺構と遺物

(1) 溝

[SD1]



写真17 調査区全景(南から)



第22図 遺構配置図 (1/50)

SD1は調査区の南端に位置する。溝の南端は調査区外に及ぶため検出していないが、 形状から溝と考えられる。検出規模は長さ $2.25\,\mathrm{m}$ 、幅 $0.85\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.2\,\mathrm{m}$ を測る。軸方向は $N-53\,\mathrm{s}-\mathrm{W}$ である。

遺物は土師質土器、瓦器、瓦質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

(2) 土抗

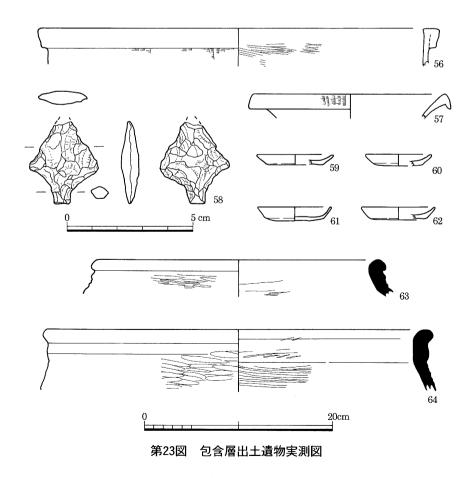
$\lceil SK1 \rceil$

SK1は調査区の中央に位置する。遺構の平面形は不定形である。検出規模は長軸1.35 m、短軸0.65m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-5°-Eである。

遺物は土師質土器の皿、瓦器埦、瓦質土器の鉢が出土したが、細片のため実測できなかった。

(3) 包含層(第23図、写真18)

包含層から弥生土器畿内第Ⅲ様式の壺(57)・鉢(56)、サヌカイト製の石鏃(58)、土師質土器の皿(59~62)、瓦器の埦、瓦質土器の甕(63・64)、陶器が出土した。



— 33 —

4 まとめ

調査区が狭小のため、遺構の復原はできなかったが、調査地付近が多様な遺物を包含することが再確認できた。今後の調査例の増加に期待したい。

鳥羽

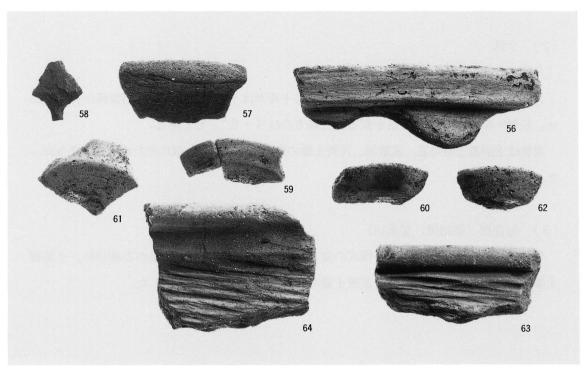
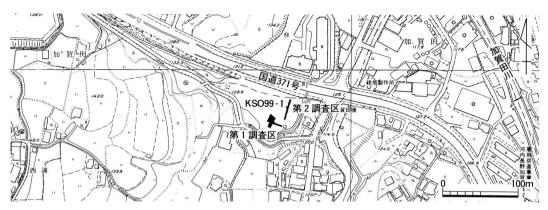


写真18 包含層出土遺物

第7節 加塩遺跡 (KSO99-1)



第24図 調査区位置図 (1/5000)

1 位置と環境

当該遺跡は、岩湧山系を水源とする加賀田川左岸の河岸段丘上に位置し、標高は約130 mである。遺跡の周辺には、北側0.05kmに縄文時代早期の押型文土器、古墳時代後期の子持勾玉が出土し、また円面硯の出土から奈良時代には公的施設があったと考えられる小塩遺跡、東側0.1kmには古墳時代から中世の集落である尾崎北遺跡、南西0.2kmには平安時代の大型建物が検出された尾崎遺跡、同0.3kmには中世の城郭の関連遺跡と見られるジョウノマエ遺跡、西側0.05kmには古墳時代、中世の集落の西浦遺跡が位置し、市域で最も遺跡の密集する地域である。

なお、本次調査は宅地造成、及び分譲住宅の建設に先立ち実施した。調査は防火水槽、配管工事等の切土工事で影響を受ける範囲について、2カ所の調査区を設定した。当該調査地は加賀田に位置する。調査期間は平成11年10月26日から同11月11日までである。

2 層序

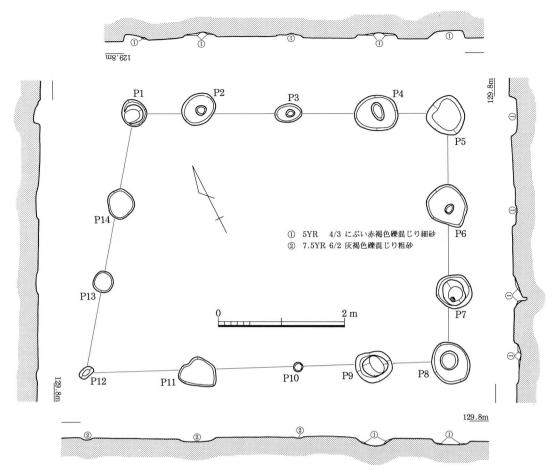
基本層序は第1調査区が、現地表面から盛土(層厚0.4m)、耕土(同0.05m)、床土(同0.05m)、5YR5/3にぶい赤褐色礫混じり粗砂(同0.35m)であった。

第2調査区は盛土(層厚0.75m)、耕土(同0.05m)、床土(同0.05m)、10YR6/3にぶい黄 橙色礫混じり粗砂(同0.05m)であった。地山は、両調査区とも、10YR5/6黄褐色礫混じり 粗砂であった。

3 遺構

第1調査区

調査面積は約132.5㎡である。遺構は竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、落ち込み、ピットを検出した。



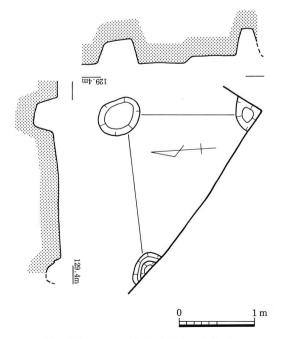
第25図 SB1遺構実測図(1/60)

(1) 掘立柱建物

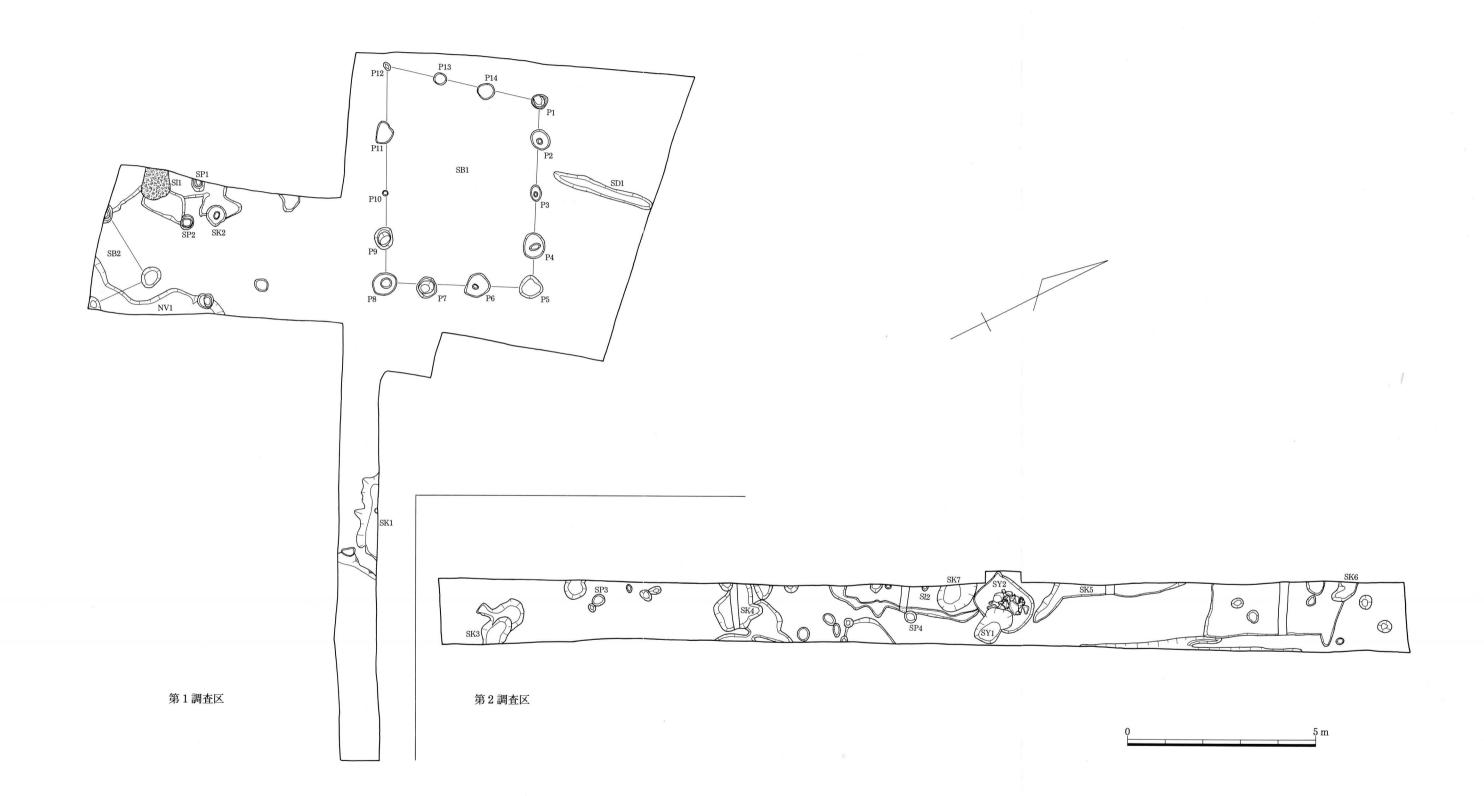
[SB1] (第25図、写真21)

SB1は調査区の北側に位置する。規模は、桁行4間(北側4.96m、南側5.8m) ×梁行3間(東側3.85m、西側4.18m)である。柱間は桁行 $1.1\sim1.7$ m、梁行 $1.08\sim1.47$ m。柱穴の平面形は円形、楕円形、不定形である。柱穴の規模は径 $0.2\sim0.7$ m、深さ $0.04\sim0.21$ mである。主軸方向はN-63°-Wである。埋土は $P1\sim P9 \cdot P14$ が5YR4/3にぶい褐色礫混じり細砂、 $P10\sim P13$ は7.5YR6/2灰褐色礫混じり粗砂であった。

なお P 1 • P $12\sim$ 14 はやや軸が異るので、これらが棚列で、建物の西側は P 2 と P 11 が深行となるとも考えられる。



第26図 SB2遺構実測図(1/50)



第27図 KSO99-1遺構配置図(1/100)

遺物は出土しなかった。

「SB2] (第26図)

SB2は調査区の南端に位置する。建物は桁行、梁行それぞれ1間のみ検出し、そのほとんどが調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出規模は南北の柱間1.6m、東西の柱間2.1mを測る。柱穴の平面形は不定形である。柱穴の径は0.5~0.55m、深さ0.19~0.62mを測る。主軸方向はN-85°—Eである。

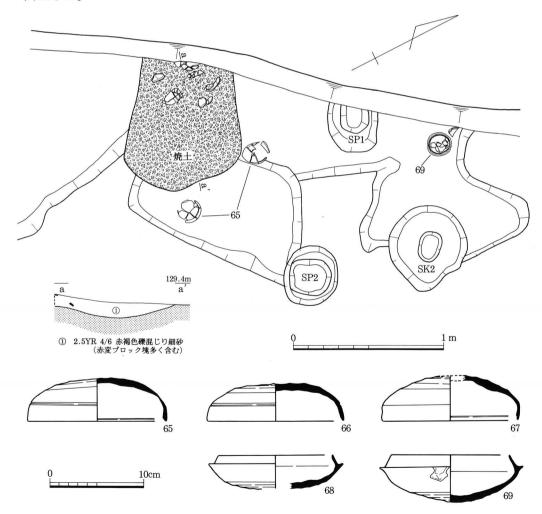
遺物は出土しなかった。

(2) 竪穴住居

[SI1] (第28図、写真22~24)

SI1は調査区の南側に位置する。遺構はかなり削平を受けてはいるものの、遺構の残存状況、土器出土状況、竈の位置から調査区の西側に拡がる竪穴住居と考えられる。平面形は不明である。検出規模は南北3.8m、東西1.4m、深さ0.08mを測る。

電から土師器の甕、須恵器の坏蓋(66)、周辺から須恵器の坏身(68・69)・坏蓋(65~67)が出土した。



第28図 SI1遺構実測図 (1/25)及び出土遺物実測図

(3) 溝

[SD1]

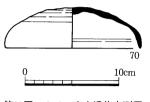
S D 1 は調査区の北側に位置する。規模は長さ2.8m、幅0.4m、深さ0.08mを測る。軸方向は $N-45^{\circ}-E$ である。

遺物は須恵器が出土したが、細片のため実測できなかった。

(4) 土坑

「SK1] (第29図)

SK1は調査区の東側に位置する。遺構の北側は調査区外に及ぶため、平面形や規模は不明である。検出規模は東西2.4m、南北0.6m、深さ0.34mを測る。



第29図 SK1出土遺物実測図

遺物は須恵器の坏蓋(70)が出土した。

$\lceil S K 2 \rceil$

S~K~2 は調査区の南側に位置している。平面形はほぼ円形である。規模は $ext{40.55m}$ 、深 $ext{20.24m}$ を測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため実測できなかった。

(5) 遺物出土ピット

$\lceil S P 1 \rceil$

SP1は調査区の南側に位置する。遺構の平面形はほぼ円形である。検出規模は径0.35 m、深さ0.21mを測る。埋土は7.5YR5/4にぶい褐色礫混じりシルトである。

遺物は土師器の甕、瓦器埦が出土したが、細片のため実測できなかった。

$\lceil S P 2 \rceil$

SP2は調査区の南側に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径0.43m、短径0.35m、深さ0.16mを測る。

遺物は須恵器が出土したが、細片のため実測できなかった。

(6) 落ち込み

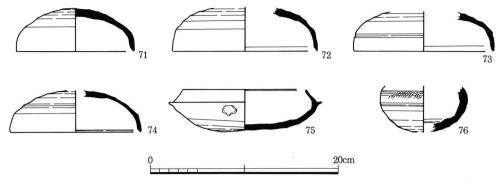
[NR1]

NR1は調査区の南側に位置する。遺構の東側と南側は調査区外に及ぶため規模は不明である。検出規模は南北3.65m、東西1.6m、深さ0.1mを測る。

遺物は土師器の甕、須恵器の坏蓋が出土したが、細片のため実測できなかった。。

(7) 包含層(第30図、写真29)

第1調査区包含層から土師器の甕・甑、須恵器の坏蓋(71~74)・坏身(75)・高坏・踉



第30図 第1調査区包含層出土遺物実測図

(76)・甕・壺、刷毛目唐津皿が出土した。

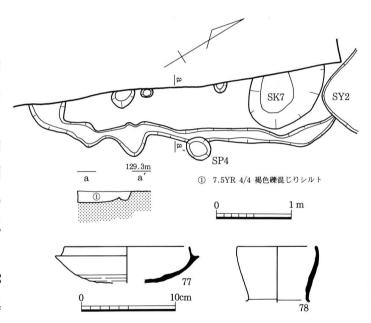
第2調香区

調査面積は約57㎡である。遺構は竪穴住居、土坑、窯、ピットを検出した。

(1) 竪穴住居

[SI2] (第31図、写真26)

SI2は調査区の中央部西側に位置する。遺構のほとんどは西側に及び、北側はSY2に切られているため、詳細は不明である。平面形は東側周溝の残存状況から方形であることが推測される。検出規模は長辺4.1m、短辺1.0m、検出面から床までの深さ0.2mを測る。埋土は7.5YR4/4褐色礫混じりシルトであった。



第31図 SI2遺構実測図 (1/50)及び出土遺物実測図

遺物は周溝内から土師器の甕、須恵器の坏身(77)・長頸壺の口縁部(78)が出土した。

(2) 土坑

[SK3]

SK3は調査区の南端に位置する。遺構の東側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。 検出規模は南北1.4m、東西1.1m、深さ0.41mを測る。埋土は2.5YR6/3黄色礫混じり細砂であった。主軸方向はN-34°-Wである。遺物は土師器の甕、須恵器の坏蓋・坏身が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SK4]

SK4 は調査区の中央に位置する。遺構の西側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。 検出規模は長軸1.3m、短軸1.26m、深さ0.18mを測る。主軸方向は $N-30^{\circ}-E$ である。 埋土は2.5YR6/3黄色礫混じり細砂であった。

遺物は土師器の甕、須恵器の坏蓋が出土したが、細片のため実測できなかった。 「SK5〕

SK5 は調査区の北側に位置する。遺構の西側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。 検出規模は南北3.5m、東西1.3m、深さ0.23mを測る。主軸方向は $N-26^{\circ}-E$ である。 埋土は2.5YR6/3黄色礫混じり細砂であった。

遺物は土師質土器、瓦器埦が出土したが、細片のため実測できなかった。

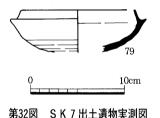
[SK6]

SK6 は調査区の北端に位置する。溝の西側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。 検出規模は長軸0.6m、短軸0.46m、深さ0.3mを測る。主軸方向は $N-45^{\circ}-W$ である。 埋土は7.5YR4/3褐色礫混じり粗砂であった。

遺物は須恵器の高坏脚部が出土したが、細片のため実測できなかった。

[SK7] (第32図、写真30)

SK7はSI2に重複して検出された。遺構の西側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出規模は長軸0.44m、短軸0.4m、深さ0.25mを測る。埋土は7.5YR4/4褐色礫混じりシルトであった。主軸方向は $N-43^\circ-W$ である。



遺物は須恵器の坏身(79)が出土した。

(3) 遺物出土ピット

[SP3]

SP3は調査区の北側に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径0.35m、短径0.28m、深さ0.3mを測る。埋土は2.5YR6/3黄色礫混じり細砂であった。

遺物は土師器が出土したが、細片のため実測できなかった。

$\lceil SP4 \rceil$

SP4 は SI2 の 周溝に 重複して検出された。 平面形は 円形である。 規模は E0.35 m、 深さ E0.14 mを 測る。 埋土は E2.5 YR6/3 黄色 礫混じり 細砂であった。

遺物は土師器、須恵器が出土したが、細片のため実測できなかった。

(4) 窯

[SY1] (第33図、写真27)

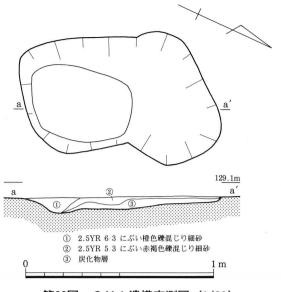
SY1は調査区の中央に位置する。平面形は不定形である。検出規模は長軸1.02m、短

軸0.7m、深さ0.09mを測る。遺構の 内部には炭化物が堆積しており、下層 にSY2が位置することから窯の一種 と考えられる。酸化または還元した箇 所は見られなかった。

遺物は土師器の甕、須恵器の坏蓋が 出土したが、細片のため実測できなかっ た。

[SY2] (第34図、写真30)

SY2は調査区の中央に位置する。 平面形は南側をSY1に、西隅の一部 をピットに切られているが、隅丸の方

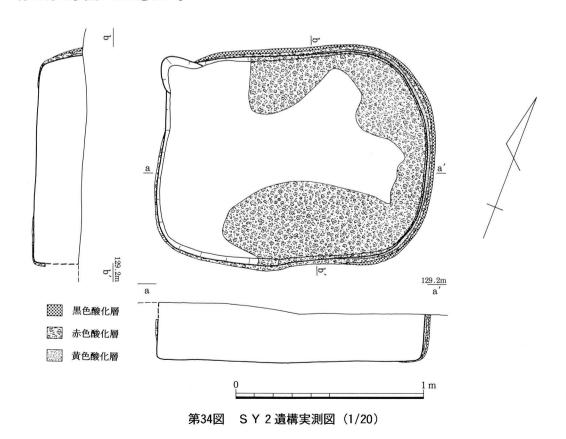


第33図 SY1遺構実測図(1/20)

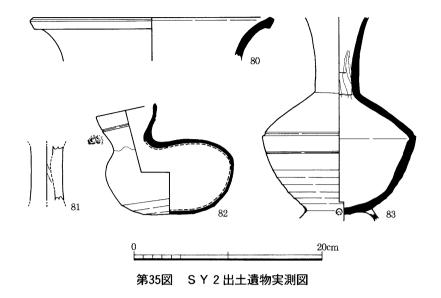
形であることがわかる。規模は長辺1.47m、短辺1.18m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-68°-Eである。遺構の埋土は5YR4/2灰褐色礫混じり粗砂で、内部の壁部、及び床部は黄色、または赤色の酸化を成していた。

遺物は土師器の甕・高坏の脚部(81)、須恵器の坏蓋・甕(80)・脚部・平瓶(82)・壺(83) が出土した。

構築時期については、考古地磁気年代測定を実施した。分析の詳細については、後述の 第8節を参照いただきたい。



— 43 **—**



(5) 包含層

第2調査区包含層から土師器の甕、須恵器の坏蓋・坏身・高坏・甕、黒色土器B類が出土したが、細片のため実測できなかった。

4 遺物

今回の調査ではSI1・SI2・SY2・SK1・SK7・包含層から6世紀中葉の土器群が出土した。出土した土器群は須恵器が大部分を占めている。。これらは当該遺跡における平成元年度の調査で出土した土器群と同時期のものである。

土師器高坏 (81)はSY2から出土した。内面には絞り目が認められる。

須恵器坏蓋 $(65\sim67)$ はSI1から、(70)はSK1から、 $(71\sim74)$ は第1調査区包含層から出土した。

(65・66・73)は体部に鈍い凹線がめぐる。口縁部内面は何れも内傾するが、(65・73)は 内面が浅く窪み、段をなしている。一方で(66)はこのような段が認められない。法量は口 縁部径 $14.2\sim14.7$ cmを測る。田辺編年のT K10型式に相当する。

(67・70~72)は体部の凹線が消滅した段階のものであるが、天井部と体部の境が屈曲している。口縁部内面は内傾するが(67)のみ口縁部内面に段を有する。法量は口縁部径12.5~15.3cmを測る。このような特徴からTK43型式に相当する。

須恵器坏身 $(68 \cdot 69)$ はSIIから、(75)は第1調査区包含層から、(77)はSIIから、(79)はSK7から出土した。何れも口縁部は内傾しながら比較的長く立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。法量は口縁部径 $12.0\sim13.2$ cmを測る。 $TK10\sim TK43$ 型式に相当するものと考えられる。

須恵器長頸壺 (78)はSI2から出土した。長頸壺の口縁部である。口縁部径は8.5㎝を 測る。 須恵器**退** (76)は第1調査区包含層から出土した。胴部径は9.5㎝を測る。

須恵器甕 (80)はSY2から出土した。口縁部径は約26㎝を測る。甕の胴部の破片も出土している。

須恵器平瓶 (82)はSY2から出土した。口縁部径6.6㎝、器高11.8㎝を測る。肩部には直径0.5㎝の円形の印刻が2つ認められる。

須恵器台付長頚壺 (83)はSY2より出土した。胴部最大径は16.3cmを測る。他の遺物より時期が下る。

その他の遺物 上記の器種以外に須恵器の壺、土師器小型壺・甕・埦が出土しているが、 いずれも細片のため図化できなかった。

この項 太田

(註1) 『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』河内長野市教育委員会 1989年3月

5 まとめ

調査の結果、平成元年度に実施したKSO89-1で得られた調査成果を再確認するように、竪穴住居から掘立柱建物に建替わる時期の遺構が検出できた。また、SY2のような土師器の焼成窯と考えられるものがみられ、土器の供給体制を考える上で貴重な成果が得られた。また、これらの遺構は周辺にかなり拡がりを持ち、遺存していると考えられるので、今後も文化財の保護に重点を置かなければならない遺跡であることが再認識できた。

鳥羽



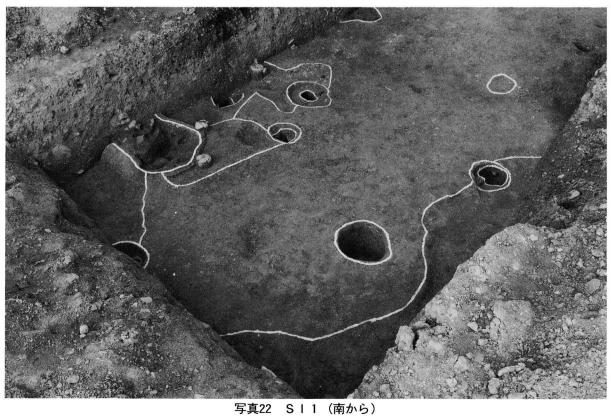
写真19 第1調査区全景(北から)



写真20 第1調査区全景(東から)



写真21 SB1(東から)



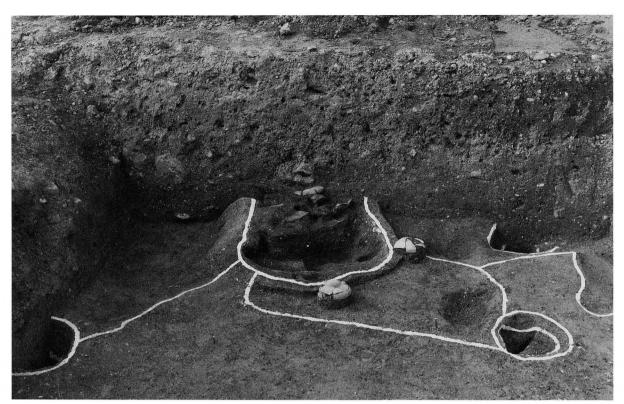


写真23 SI1 (東から)

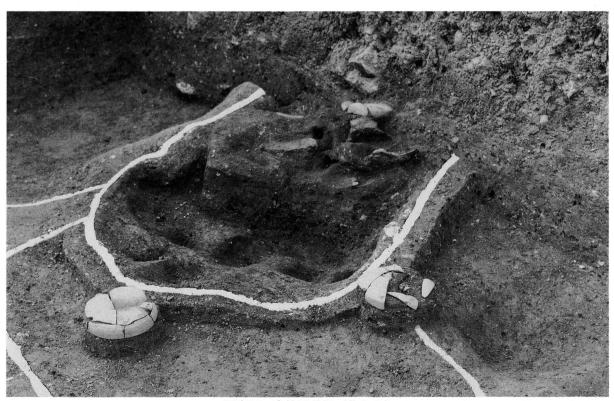


写真24 竈検出状況(北から)

写真25 第2調査区全景(南から)



写真26 SI2 (東から)

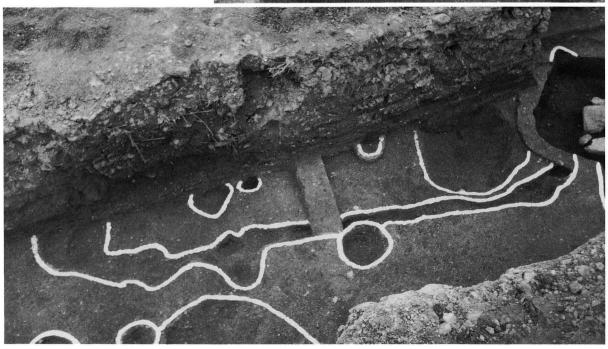




写真27 SYI (南から)

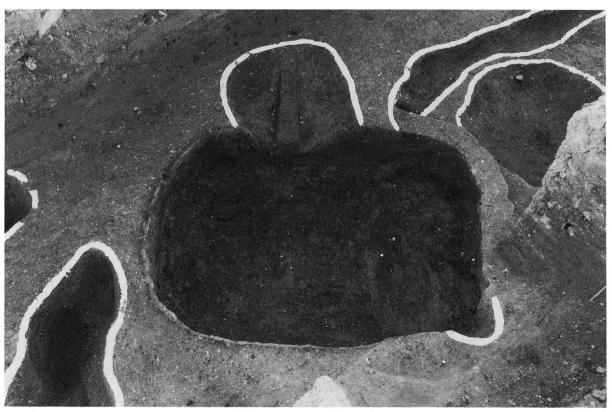


写真28 SY2 (北から)

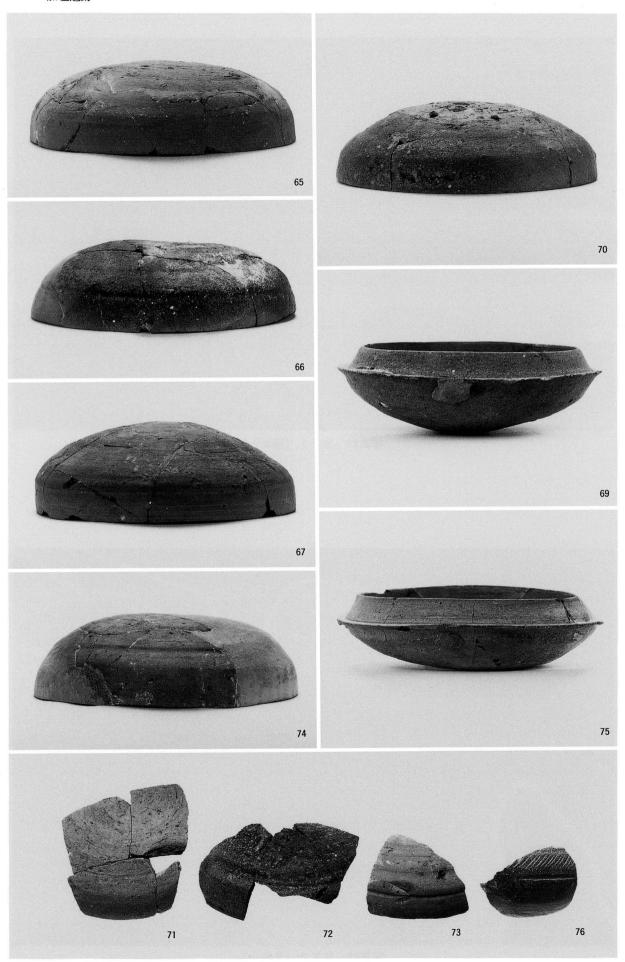


写真29 SI1 (65~67·69)、SK1 (70)、第1調査区包含層 (71~76)

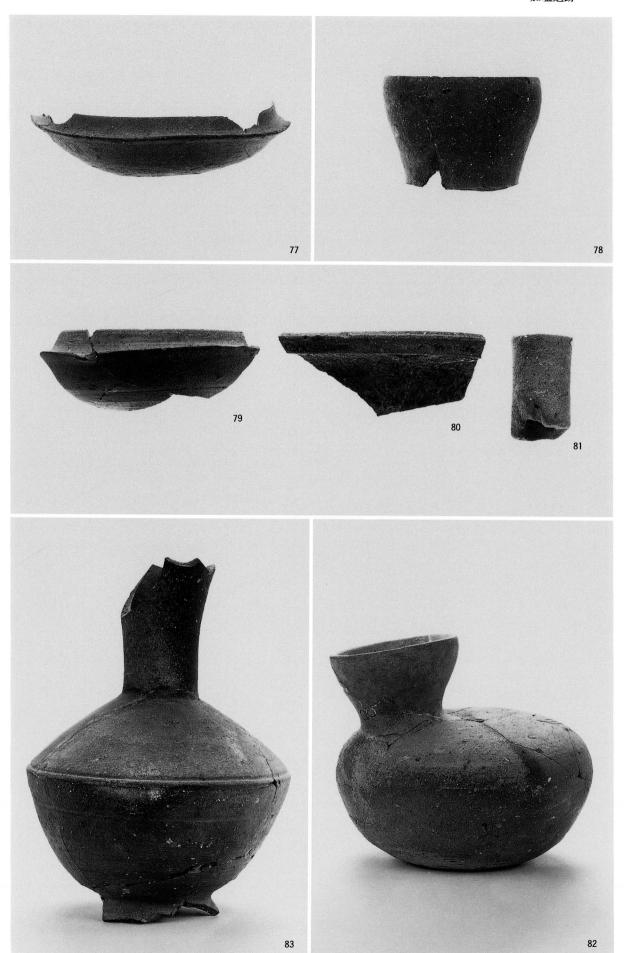


写真30 SI2 (77·78)、SK7 (79)、SY2 (80~83)



第8節 加塩遺跡における考古地磁気年代推定

この考古地磁気年代推定用の試料は平成11年11月10日、SY2の焼土から採取した。

1 考古地磁気年代推定の基礎

磁石は北を指す。地球には地磁気が存在するためである。地磁気はベクトル量であり、ある地点における地磁気を記述するために、方向(偏角と伏角)と大きさ(全磁力)が必要である。一般に、磁気コンパスの磁針が指す北(磁北)は、真北(地図の経線方向)からずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面の下になるように傾く。この傾斜角が伏角である。河内長野市の現在の偏角は約6.7°Wで、伏角は約48°である。また、全磁力は、約0.45エルステッドである。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときにできる磁場の分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5度傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北(南)極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、大きさ(全磁力)も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって明らかにすることができる。どんな物質でも、ある(強)磁場中に置かれると磁化を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁化が消える。しかし、強磁性物質(磁石になれる物質)では、外部磁場が消えても磁化が残る。これが残留磁化である。残留磁化の強さや安定性は、磁化を獲得する時の条件によって異なる。残留磁化はその獲得方法の違いによっていろいろな名前で呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するのが熱残留磁化である。岩石には小量の強磁性粒子(赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物)が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁化を帯び、冷えてからはその残留磁化を保持し続ける。これが熱残留磁化である。土も焼かれると、冷却の過程で同様の熱残留磁化を獲得する。熱残留磁化の性質を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生時または土が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その大きさは地磁気の大きさに比例し、何億年もの長い期間でも変質しない。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。遺跡の焼土の熱残留磁化測定から得られた過去2000年間の西南日本における偏角一伏角の変化を第38図に示す。偏角は20°W~15°E、伏角は35°~60°の間で変化

している。第38図のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、¹⁴C法やフィッション・トラック法のような放射(絶対)年代測定法とは異なり、それだけで独立して年代を決定できない。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から2つか3つの候補年代が出てくる。そのうちの何れを採用するかは、考古学的推定に頼ることになる。

従来、考古地磁気年代推定では、二次磁化を除去するための消磁実験は行われていなかった。考古地磁気試料として用いられる焼土は、焼成温度がキューリー温度以上の高温に達していれば、その熱残留磁化は非常に安定なものであると考えられること。さらに、せいぜい2000年前までの歴史時代のものを測定の対象としているため、二次磁化の主成分である粘性残留磁化(VRM)は少量しか付いていないと推定されたためである。しかし、近年、測定機器の性能の飛躍的な向上により測定精度が高くなり、わずかな二次磁化の影響も識別できるようになってきた。そこで、中島・谷崎(1990)は、考古地磁気試料について段階交流消磁実験を実施し、考古地磁気試料にも消磁実験が必要であることを明らかにした。そこで、本報告でも交流消磁を全試料について実施し、第38図の地磁気永年変化曲線の偏角一伏角図上にその残留磁化測定結果をプロットし、誤差角(α₅)を考慮した上で年代を推定を行った。

2 試料の採取と測定

(1) 試料採取方法

遺構の焼土から次の様な手順で試料を採取する。

- ① 焼土面に先の尖ったハンマーで、1辺が数cm程度の立方体試料を取り出すための溝を、 試料が床面から外れないように、手で押さえながら丁寧に掘る。
- ② 溝を掘り終わった後、掘り込み作業中に試料表面についた砂や石を刷毛で丹念に取り 除く。
- ③ 薄く溶いた石膏をビニール袋に入れ、試料全体にかけて表面を補強する。
- ④ 乾燥後、やや固めの石膏を試料上面にかけ、1辺5 cmの正方形のアルミ板をすばやく 押しつける。石膏が固まるのを待ち、アルミ板を外す。
- ⑤ アルミ板を用いて作った平面の最大傾斜の方位と傾斜角を、考古地磁気用磁気コンパス(Hirooka, 1971)で測定し、平面上に方位測定位置を示すマーク(平面を定義する3つの点)と試料番号を記入する。
- ⑥ ハンマーで試料を掘り起こし、試料の底面を石膏で補強し、新聞紙等に包み持ち帰る。

(2) 試料整形方法

遺構で採取した試料はそのままでは測定できないので、試料整形を以下のように行う。

- ① 試料を1辺3.5㎝の立方体に切断するために、プラスチックの型板(34×34㎜の正方形) を利用し枠取りの線を引く。この時、型板のマークと試料表面の方位測定位置を示す マーク(3点)を合わせる。
- ② 試料温度が上がるのを防ぐために冷却水をかけながら、ダイヤモンド・カッターで1 面ずつ切断する。切断面が崩れないように石膏で補強し、次の面の切断を行う前に試 料を充分乾燥させる。この作業を5回繰り返すと立方体試料が得られる。
- ③ 試料表面についた余分な石膏をカッターで削り落とす。

(3) 残留磁化測定方法

残留磁化は、当社製のリング・コア型スピナー磁力計(SMD-88型)を用いて測定した。 交流消磁実験には二軸回転方式の当社製DEM-8601-2型を使用した。この装置は、三層 の円筒 μ -メタルによって外部磁場(地磁気)は10mT(ミリテスラ)以下にシールドされて いる。以下に今回実施した残留磁化測定と交流消磁の方法について述べる。

- ① 採取した全試料について、自然残留磁化(NRM)測定を行う。
- ② NRM測定結果をみて、段階交流消磁実験を行うパイロット・サンプルを各遺構より1 個選ぶ。
- ③ パイロット・サンプルを5、10、15、20、30、40、50mTの各磁場で順に消磁し、その都度、残留磁化を測定する。各消磁段階の測定結果を消磁ベクトル図(Zijderveld, 1967)に表し、同図の直線上にのる最適消磁強度を決定する。
- ④ 残りの試料を全て最適消磁強度で消磁し、その残留磁化を測定する。そして、その平均値(パイロット・サンプルのデータを含む)を、年代推定のための考古地磁気データとして採用する。

(4) データ整理

測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、試料を遺構のもとの位置に戻した時の真北を基準方向とする座標に対するものに変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置(地理的緯度・経度)、および方位(試料の一つの基準面の走向・傾斜)が必要である。位置については、1/25000程度の縮尺の地形図から、その遺構の緯度・経度を読み取ればいい。方位は、試料採取の作業で磁気コンパスを使って測定している。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの遺構から8~10個程度 の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で得られた偏角(Di)、伏角(Ii)から平 均値(Dm, Im)を求める。ここで用いる統計学的方法はFisherによって確立されたものである。各試料の測定値を、方向(Di, Ii)の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、n組の(Di、Ii)より

 $N = \Sigma \cos Ii \cdot \cos Di$ (北向きの成分)

 $E = \Sigma \cos \mathbf{i} \cdot \sin \mathbf{D} \mathbf{i}$ (東向きの成分)

_ _ _

 $Z = \Sigma \sin Ii$

(鉛直の成分)を求めると、合ベクトルの大きさR、および

Dm, Imit,

$$R = \sqrt{Z^2 + N^2 + E^2}$$

 $Dm = tan^{-1} E/N$

Im=sin-1 Z/Rで与えられる。

このとき、信頼度係数kは、

 $\mathbf{k}=(n-1)$ / (n-R) となる。 \mathbf{k} が大きいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数百の値になる。

誤差角α₅は、危険率5%として

$$lpha_{95} = \cos^{-1} \left[1 - \frac{n-R}{R} \left\{ \left(\frac{1}{0.05} \right)^{\frac{1}{n-1}} - 1 \right\} \right]$$
 で与えられる。

αssが小さいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数度以内になる。

これよりDm、Imのそれぞれの誤差の幅として、

$$\delta D = \alpha_{95}/\cos Im$$
(偏角誤差)

$$\delta I = \alpha_{95}$$
 (伏角誤差)

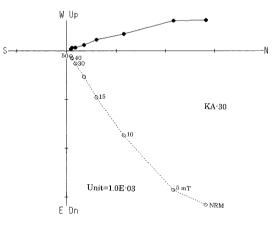
が求められる。

以上のようにして得られた計算結果を、一つの遺構を代表する考古地磁気データとして いる。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原(1981)に詳しく解 説されている。

3 残留磁化測定結果

SY2の焼土より11個の考古地磁気 用の定方位試料を採取し、熱残留磁化 を測定した。熱残留磁気測定結果を第 4表・第5表、第36図〜第38図にまと めた。現在の地磁気偏角の補正は、国 土地理院の1990年の磁気偏角図から読 取った6.7°Wを使用した。



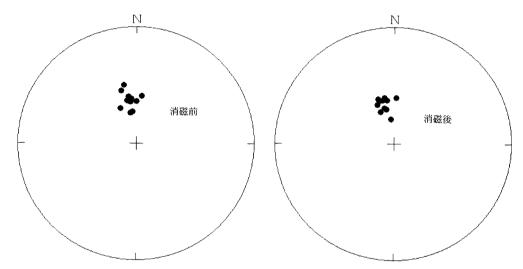
第36図 パイロットサンプルKA-30の直行ベクトル図

磁化の安定性を確かめるために行ったパイロットサンプルKA-30の段階交流消磁の結果を第36図に示す。この図はZijderveid図又は消磁ベクトル図と呼ばれ、同図の黒丸は水平成分,白丸は鉛直成分を表している。S(南)、N(北)、E(東)、W(西)は水平成分の方向、Up(上向き)、Dn(下向き)は鉛直の方向である。白丸の横に記した数字は交流消磁の強度で、単位はMT(ミリテスラ)である。この図で、丸印の間をむすんだ直線がその消磁段階で消された磁化ベクトルとなる。磁化の各成分は図上では直線上に並ぶ点の列で表される。特に考古地磁気試料のような単純な受熱を持った試料では問題とする初期磁化は原点に向う直線として表される。

第36図を見ると、比較的安定で10mTで二次磁化が消磁され、あとは原点に向って消磁されている様子がわかる。段階消磁の結果より、最適消磁強度を15mTと判断して、残りの試料すべてを15mTで消磁を行った。

今回の残留磁化強度は、10⁻³emuであり良く焼けていると思われる。

偏角と伏角の平均値についての信頼度kは164.8、誤差角 α $_{95}$ は3.6° であり、まずまずの信頼度のデータと言える。



第37図 消磁前(NRM)と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図

	交流》	肖磁前	交流消磁後 消磁強度=15mT			
試料名	偏角 °E	伏角。	強度 ×10 ⁻³ emu	偏角 °E	伏角。	強度 ×10 ⁻⁴ emu
KA-21	- 0.3	60.0	2.24	- 8.3	72.4	3.96
KA-22	-11.4	67.9	1.44	2.9	57.4	1.60
KA-23	- 6.9	57.9	1.09	-15.7	63.6	1.31
KA-24	- 7.8	67.2	0.72	-12.9	65.3	0.53
KA-25	-12.1	59.0	4.61	-23.9	59.8	6.00
KA-26	- 8.0	60.5	2.35	-12.1	56.6	2.96
KA-27	-24.1	63.0	1.70	-23.8	65.3	1.85
KA-28	- 9.6	56.6	3.93	-15.2	58.3	16.1
KA-29	6.5	56.2	1.89	- 9.4	59.0	5.64
KA-30	-12.5	47.5	4.26	-19.8	56.2	11.5
KA-31	-16.2	50.9	6.91	-19.8	57.7	8.45

第4表 熱残留磁気測定結果

第4表は、個々の試料の熱残留磁気測定結果(Di、Ii)である。第37図は消磁前と15mTでの消磁後の磁化方向の等面積投影図である。

第5表に消磁前と消磁後についての、磁気方向の平均値(Dm、Im)、誤差角 $(\alpha 95)$ と信頼度係数(k)、および平均磁気強度を示した。試料数nは平均値(Dm、Im)を計算した試料数である。

(1) 交流消磁前の測定結果

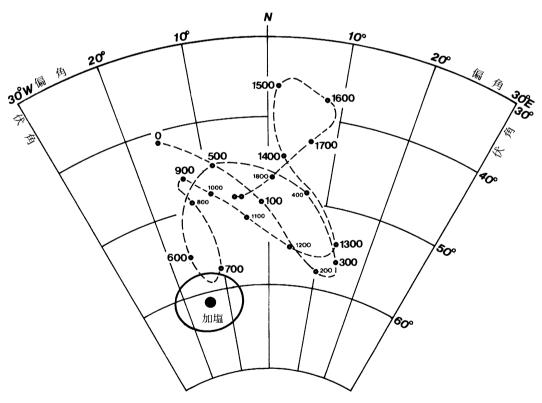
遺構名	試料数 n	Dm (°E)	Im (°)	α ₉₅	k	平均磁化強度 ×10 ⁻³ emu
KSO99-1	11	- 9.3	59.0	4.2	120.5	2.83

(2) 交流消磁後の測定結果

遺構名	試料数 n	Dm (°E)	Im (°)	α ₉₅	k
KSO99-1	11	-14.4	61.3	3.6	164.8

第5表 考古地磁気測定結果(平均磁化方向)

4 年代推定



第38図 広岡により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の 地磁気永年変化曲線と測定結果

西南日本の地磁気永年変化曲線(広岡, 1977)に第5表の消磁後の測定結果をプロットすると第38図のようになる。黒丸が平均磁化方向で、それを囲む楕円は誤差角 α 55の範囲を

示している。本来ならば黒丸は永年変化曲線上に並ぶはずであるが、実際には永年変化曲線の不確かさや、測定時の誤差、試料採集時の誤差、磁化獲得の強弱、遺構の傾動などいろいろな誤差が積算されて永年変化曲線上には並ばないことが多い。永年変化曲線が地磁気の方向を正しく示しているとして、平均磁化方向に一番近い曲線の年代が考古地磁気推定年代とする。第38図の平均磁化方向(黒丸)は7世紀中頃の曲線に良く接近している。楕円の誤差角を考慮すると伏角がやや深いが推定年代はA.D.650±50年となろう。考古学年代とも矛盾しないものと思われる。

5 引用文献

Hirooka, K.(1971): Archaeomagnetic study for the past 2000 years in Southwest Japan. Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral, 38, 167-207.

広岡公夫(1977): 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究,15,200-203.

中島正志・夏原信義(1980):考古地磁気年代推定法.考古学ライブラリー9,ニュー・サイエンス社

中島正志・谷崎有里(1990):考古地磁気試料の交流消磁実験.福井大教育紀要

Shibuya, H.(1980): Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2000 years by means of archaeomagnetism.大阪大基礎工修論, 54p.

Zijderveld, J.D.A.(1967): A.C. demagnetization of rocks: analysis of results. In Methods in paleomagnetism, Collinson et al.(eds.), 254-295, ElsevierPub. Com.

報告書抄録

ふりがな	かわちながのしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ					
書 名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書					
副書名	本多町北遺跡・下里町遺跡・西代藩陣屋跡・三日市遺跡・市町東遺跡・加塩遺跡					
巻次	XVI					
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第32輯					
編著者名	尾谷雅彦 鳥羽正剛 太田宏明 藤原 哲					
編集機関	河内長野市教育委員会					
所 在 地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111					
発行年月日	2000年 3 月31日					

所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村 遺跡	北 緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほんだちょうきた いせき 本多町北遺跡	おきから きりらがのし 大阪府河内長野市 ほんだちょう 本多町 4 - 33他	27216 府 河135	135° 34′ 6″	34° 27′ 11″	平成9年12月22日 { 平成10年2月28日	850 m²	店舗
しもざとちょうい せき 下里町遺跡	kkity 4.45 D 5 kkf のし 大阪府河内長野市 Lucit 52 th 下里町	27216 府 河136	135° 31′ 57″	34° 26′ 37″	平成10年2月3日 { 平成10年2月20日	140 m²	市道建設
西代藩陣屋跡	akath 4 かりちばのし 大阪府河内長野市 にはいきょう 西代町10-19	27216 府 46 河 43	135° 34′ 13″	34° 27′ 3″	平成11年3月11日 { 平成11年3月31日	31.2m²	教会増築
三日市遺跡(98-2調査)	表表验。本力与超過 大阪府河内長野市 かかだきあり 中片添町1656他	27216 府 68 河 56	135° 34′ 30″	35° 20′ 40″	平成11年1月11日 , 平成11年2月5日	185.0m²	分譲住宅建設
(99-5調査)	取片添町296		135° 34′ 34″	35° 20′ 42″	平成11年12月2日	3.6m²	専用住宅建設
h\$51,30%以\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	はまからかりを好りし 大阪府河内長野市 1185は3 市町401— 1	27216 府125 河 96	135° 34′ 12″	34° 39′ 49″	平成11年9月24日 { 平成11年10月8日	12.0m²	専用住宅建設
加塩遺跡	はまからかりを知らりし 大阪府河内長野市 かが置田	27216 府118 河 89	135° 34′ 8″	34° 25′ 39″	平成11年10月26日 (平成11年11月11日	189.5m²	宅地造成分讓住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
本多町北遺跡	散布地	中世	耕作地・石垣・溝	瓦質土器・陶磁器	
下里町遺跡	"	古墳・中世	溝	須恵器・青磁	
西代藩陣屋跡	"	近 世	溝•土坑	陶磁器	
三日市遺跡(98-2調査)	集落	中 世	掘立柱建物・溝	土師質皿・瓦器	
三日市遺跡(99-5調査)	"	奈良•平安	溝・土坑	須恵器•瓦器	
市町東遺跡	散布地	弥生・中世	溝・土坑	弥生土器・瓦質土器	
加塩遺跡	集落	古 墳	竪穴住居・掘立柱建物・ 窯	須恵器	

河内長野市文化財調查報告書第32輯 河内長野市埋蔵文化財調查報告書W

2000年3月31日発行

発 行 大阪府河内長野市原町396-3 河内長野市教育委員会 0721-53-1111

印 刷 ㈱中島弘文堂印刷所